

Women's Social and Political Union (女性社会政治連合) と英国の婦人参政権運動

富田裕子

1. はじめに

女性社会政治連合 (Women's Social and Political Union、以下WSPUと略) は、1903年にエメリン・パンクハースト (Emmeline Pankhurst) によって設立された婦人団体で、ミリセント・フォーセット夫人の率いる婦人参政権協会全国連盟 (National Union & Women's Suffrage Societies、以下NUWSSと略) とともに英国の婦人参政権運動において大きな業績を残した。英国では1945年以降、英国の女性史に関する研究が盛んに行われるようになり、特に婦人参政権運動に関する研究は着実に進められてきており、多くの著書、編書、研究論文が出版された。これらの中で代表的なものとしては、1950年代にはRoger Fulfordの *Votes for Women* が、1960年代にはDavid Mitchellの *The Fighting Pankhursts* が、1970年代にはConstance Roverの *Women's Suffrage and Party Politics in Britain, 1866-1914*、Andrew Rosenの *Rise up Women*、David Morganの *Suffragists and Liberals*、Martin Pughの *Electoral Reform in War and Peace, 1906-1918*、Brian Harrisonの *Separate Spheres*、Jill Liddington、Jill Norris共著の *One Hand Tied Behind Us* が、1980年代にはStanley Holton、*Feminism and Democracy* が出版された¹。これらの著作の多くは男性の研究者によって書かれた学術的に優れたもので、婦人参政権と政党、政治的改

革 (political reform) との関係を詳しく分析している。*One Hand Tied Behind Us* (『片手を後にしばられて——女性参政権運動の高揚』) は地方都市における労働者階級の女性の婦人参政権運動への参加と貢献に初めて焦点をあて、婦人参政権運動に参加した大半の女性は中産階級であるという定説を打ち破った極めて斬新で本格的な研究書である。A. V. John and Claire Eustance 編著の *The Men's Sphere* はそれまで注目されなかった婦人参政権運動を支えた男性たちに焦点をあて、かれらの設立した団体の活動を考察したものである²。

2000年以前に出版された書物の中で、パンクハースト、WSPUについて部分的に言及したものは多いが、これらの話題に的を絞り、詳しく分析したのは Mitchell の *The Fighting Pankhursts* だけだった。しかし21世紀に入ってからには2003年にWSPUの誕生100周年を祝う 'The Suffragette and Women's History' (「女性の婦人参政権論者と女性史」) というタイトルの国際会議が、英国のポーツマス大学で英国女性史の大家で特にパンクハースト研究で名高い、同大学教授 June Purvis により主催された³。また Martin Pugh の *The Pankhursts* や June Purvis の *Emmeline Pankhurst* のような数多くの一次資料を用いた極めて内容の豊かな、個々の著者の多年の研究を集大成した書も出版された⁴。更に2005年には英国の学術雑誌 *Women's History Review* がパンクハーストの婦人参政権運動に焦点をあてた特集号も組み、WSPUとパンクハーストに対する興味は英国では衰えることなく、現在も盛んに研究が進められている⁵。

しかし残念ながら日本においては英国婦人参政権の研究は大変遅れており、今井けい『イギリス女性運動史』、今井けい「針子から治安判事へ——ハナ・ミッチェルの生涯」、河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、河村貞枝、今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』など4つの著作の中で、パンクハースト母娘とWSPUの運動が簡単に紹

介されているのと、エメリン・パンクハーストの自伝 *My Own Story* の日本語訳が出版されているにすぎない⁶。

本稿では日本では今までほとんど知られていない WSPU の設立から解散に至るまでの経過を当時の時代背景を考慮しながら詳しく追求してみた。WSPU の活動期間は4つの時期に分けることが可能である。第1期は1903年の設立からロンドンに本部を移した1906年まで、第2期は1906年から調停委員会による婦人参政権法案に望みを託した WSPU が戦闘的な活動を中止するという休戦宣言をした1910年まで、第3期は調停法案の失敗により WSPU が再び戦闘的な活動を再開した1911年から1914年の第1次世界大戦の勃発まで、第4期は1914年以降 WSPU が解散に至るまでである。WSPU の活動目標、会員募集の方法、運営資金の集め方、活動内容とその成果、WSPU の活動に対する政府や一般市民の反応、機関誌の出版、解散理由についても論じてみたい。更に WSPU が成し遂げた業績や内部紛争など WSPU の抱えていた問題点もフォーセット夫人の NUWSS と比較しながら分析したい。最後に WSPU が英国社会に与えたインパクト、また海外（米国、日本など）の国々の婦人参政権運動に与えた影響についても検討してみたいと思う。本稿では今まで論じられることのなかった WSPU と日本の婦人参政権運動との関係についても新しい分析を試みるつもりである。

本稿を執筆するにあたって用いた資料は、Leicestershire Records Office や The National Archives や The Women's Library に保存されている WSPU の会員の手紙、演説の原稿、日記などの私文書や警察の報告書、国会議事録のような公文書、写真、葉書、バッジ、旗などの文書ではないアーカイブズや WSPU の機関誌、当時の新聞、雑誌の記事、WSPU の指導者であったエメリン、クリスタベル、シルビア・パンクハースト、Pethwick Lawrence や他の会員によって書かれた自伝、WSPU と同時期

に存在したNUWSSのリーダー、フォーセット夫人やNUWSSの会員Ray Stracheyたちの自伝などの一次資料と前述した主要な二次資料である。

2. 英国におけるWSPU以前の婦人参政権運動の歴史

英国において婦人参政権は19世紀の初めに選挙法改正の論議の中で大衆の関心をひく問題として登場した。‘There was no need to extend the suffrage to women because their fathers and husbands would protect their interests.’ という1820年のJames Millの主張にたいして、William ThompsonとAnna Wheelerは1825年に*An Appeal of One-Half the Human Race, Women* (『人類の半分、女の訴え』)の中で「平等の政治的権利による以外に女性の市民的権利を保証するものはない。」と述べ、婦人参政権の必要性を主張した⁷。1832年の選挙法改正案の論議の中で、Henry Huntは法案に記されている財産権の必要条件を満たす未婚の女性にだけ参政権を与えることを要求した請願書を提出した⁸。しかし彼の要求は受け入れられず、男性だけに選挙権が与えられた。その後クウェーカー教徒で奴隷反対運動家のAnne Knightがチャーチスト運動に関わっていた女性たちを助けて、Sheffield Female Political Association (シェフィールド婦人政治団体)を1851年に結成し、婦人参政権の請願書を起草し、同年末にそれを上院に提出した⁹。同年John Stuart Mill (ジョン・スチュアート・ミル)の妻、Harriet Taylor (ハリエット・テイラー)は*Westminster Review*に寄稿した“Enfranchisement of Women”という論文の中で婦人参政権の必要性を説いた¹⁰。

組織化された婦人運動は1850年代と1860年代前半にロンドンのLangham Place Group (ランガムプレイス協会)とよばれたロンドンの

ランガムプレイスに集まった知的なミドルクラスとアッパーミドルクラスの女性のグループによって始められた¹¹。このグループの中心人物は **Barbara Leigh-Smith Bodichon** と **Bessie Rayner Parkers** で、このメンバーたちは教育、雇用、政治の分野における女性のための改革を目指し、いろいろな提案をすると共に、女性に対する様々な援助も施していた。またグループのメンバーは即時に具体的な成果をもたらす諸改革に取り組み、様々な運動を進めていった。たとえば、1855年に **Married Women's Property Committee**（既婚女性の財産に関する法案委員会）を発足させ、既婚女性に財産権を与えるための法的改正を強く要求した。また女性の雇用、教育法の改正によって女性の状況を改善しようとも試みた。更に英国初のフェミニストのための定期刊行物 *English Woman's Journal* を1858年から1864年まで出版し、婦人参政権に関する記事を多く掲載することによって人々のこの問題への関心を高めることに貢献し、初期の婦人運動において中心的な役割を果たした¹²。

女性の高等教育や女性雇用の改善問題に特に興味を持っていた急進的なランガムプレイス協会のメンバーの幾人かは1865年にロンドンのケンジントンに女性だけの会員から構成される **Kensington Society**（ケンジントン協会）を設立した。主なメンバーには **Emily Davies**、**Elizabeth Garrett Anderson**、**Barbara Leigh-Smith Bodichon**、**Frances Buss**、**Dorothea Beale** などがいた¹³。**Buss**、**Beale**、**Davies** は英国女性の教育改善と女性の高等教育への門戸開放を求め、イングランドにおける初の女医となった **Anderson** は女性のための病院を設立し、医者や看護婦などの医療専門職の道を女性のために拓くことに取り組んでいた¹⁴。

ケンジントン協会が設立された1866年までに、ランガムプレイス協会をはじめとする少数グループや婦人運動家の活動により、既婚女性に対する不平等な法律の一部が改正されることによって、既婚女性の地位は多少

改善された。たとえば、1857年に離婚法が成立して、それまで不可能であった離婚が可能になり、また既婚女性の財産に関する法案も提出された。雇用の分野ではより多くの女性がタイピストなどの事務職や電話交換手などの新しい職に就くようになり、職種も広がった。ケンジントン協会は設立当初、女性たちに英国の政治や文学について語り合う場を提供していた。そして前述した女性改革が進むに連れて、婦人参政権獲得が女性の低賃金や不当な労働条件など、女性に対する差別問題のすべての解決策になるのではないかという結論に達し、婦人参政権問題についての活発な討論を交わすようになった。更に婦人参政権のための発起委員を選出し、「男女を問わず、すべての世帯主に選挙権を要求するべきである。」と記した請願書を起草し、1,499人の署名を集めた¹⁵。当時女性には請願書を国会に提出する資格がなかったため、Emily DaviesとElizabeth Garrett Andersonがケンジントン協会を代表して、その請願書を1866年6月7日、ジョン・スチュアート・ミルに手渡した¹⁶。多くの研究書はこの日を婦人参政権運動の始まった記念すべき日とみなしている。なぜ彼女らはミルにこのような重要な役目を託したのであろうか。

ミルは哲学者、経済学者としての名声を確立していたが、妻ハリエット・テイラーの影響を多大に受け、女性に平等な権利と機会を与えるべきであると主張し、妻と共に婦人参政権運動を推進した¹⁷。この発言を実現するため政治家になる決意を固め、1865年に選挙公約に婦人参政権を掲げてLiberal Party（自由党）の候補として選挙に出馬し、国会議員に当選した。かれは著書*The Subjection of Women*（『女性の隷従』）の中でも女性の平等な権利と機会について論じ、英国はもとより米国、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏だけでなく、ドイツ、フランスなどにおいても出版後直ちに翻訳され、大きな影響を与え、婦人参政権運動を支える重要な議論を提供した。このような事情を考慮すれば、いかにミルが

ケンジントン協会の婦人参政権の請願書を託す人物として、適任であったかがわかる。

ミルは1866年下院にこの請願書を提出し、婦人参政権運動への貴重な糸口を作った。翌年ミルは国会ではじめて婦人参政権推進の演説をし、第2次選挙法改正案の討議の中で納税者の女性に選挙権を与えるべきであるという事項を改正法案に含める修正案を提出したが、194対73で否決された¹⁸。

しかしこの修正案提出がきっかけとなり、ロンドンとマンチェスターに婦人参政権団体が発足した。Kensington SocietyがLondon Society for Women's Suffrage（ロンドン婦人参政権協会）に発展して、ロンドン近辺の婦人参政権運動の中心的役割を果たすようになり、マンチェスターでは1867年にManchester Women's Suffrage Society（マンチェスター婦人参政権協会）が設立された¹⁹。Ursula Brightと彼女の夫でもありJohn Brightの弟でもあるJacob Brightや弁護士Richard Pankhurstもこの協会の主要なメンバーで、Lydia Beckerが書記を務めていた。マンチェスター婦人参政権協会はイングランド北部を中心に英国で最も有力な婦人参政権団体へと成長していった。その後エジンバラ、プリストル、バーミンガムなどの地方都市にも婦人参政権運動の団体ができたため、マンチェスター婦人参政権協会が中心となって、これらの団体はお互いに協力しあい、婦人参政権運動を更に促進するために1つにまとまることを望むようになった。その結果、中央団体としての役割を果たすNational Society for Women's Suffrage（婦人参政権全国協会、以下NSWSと略）が1868年に誕生し、婦人参政権運動が全国的な運動へと発展していった²⁰。リディア・ベッカーはNSWSの書記となり、集会、文書の配布、国会における婦人参政権の請願運動など合法的な手段を用いた運動を指揮した。また彼女は1870年3月に月刊紙『婦人参政権ジャーナル』（*Women's Suffrage*

Journal) を創刊し、議会の内外で行われた婦人参政権支持と考えられる演説を全て丹念にこの月刊紙に掲載し、1891年に亡くなるまで終生編集を続けた²¹。

1868年の選挙でミルが敗れた後、Jacob Brightが婦人参政権運動を支持する国会議員のリーダーとなり、Richard Pankhurstが起草した婦人参政権の法案をBrightが1870年に国会に提出した²²。ベッカーは私有財産を持つ女性にだけ選挙権を与えるべきであるという内容の請願書を何度も提出するなど熱心に運動を続けた²³。彼女の制限つきの提案はある程度の支持を集め、1870年代に婦人参政権法案はほとんど毎年国会に提出され、討議されるまでになった。1884年第3次選挙法改正法案が論じられている間、裕福な100,000人の女性納税者に参政権を与えることを要求する法案を提出するまでに至り、この法案は保守党の議員のかなりの支持を得たが、当時政権を握っていた自由党の首相William Gladstoneの反対宣言のため、104人の国会議員も反対し、この法案は否決された²⁴。

それ以後NSWSは分裂と挫折の時期に落ち込んでしまい、ベッカーの不断の努力と他の少数の熱心な女性たちによって婦人参政権運動はかろうじて命脈を保っていた。だが1889年にMrs. Humphry Ward (ハンフリー・ウォード夫人)をはじめとする有力な女性たちからの婦人参政権に反対する厳粛な声明が発表されると、婦人参政権運動はますます衰退していき、1890年のベッカーの死は更にそれに拍車を掛けてしまった²⁵。

しかしFaithfull Beggが国会に提出した婦人参政権法案が1897年に第2読会を通過したことがきっかけとなり、それまで各地で分裂していた婦人参政権団体が再統合され、同年婦人参政権協会全国同盟 (National Union of Women's Suffrage Societies、以下NUWSSと略) が設立された。1890年のベッカーの死後、婦人参政権運動の新しい指導者としての頭角を現し始めたMillicent Garrett Fawcett (ミリセント・ギャレット・フォーセツ

ト)が、その会長に選ばれ、1919年に引退するまで会長を続けた。NUWSSは当初は主として知識人や有産階級の女性を中心にして、法律を順守し、穏健な活動を展開した²⁶。しかし政府も一般大衆も合法的な婦人参政権請願運動をお決まりの年中行事ぐらいにしか考えず、法令となる可能性は全くなかった。新聞も沈滞していた婦人参政権問題を取り上げなくなっていた。このような状況の中でWSPUは誕生した。

3. WSPUの第1期——WSPUの設立

エメリン・パンクパーストは1903年10月10日にマンチェスターの自宅Nelson Street 62番地に長女クリスタベルの助けを得て、WSPUを結成した²⁷。果たして当時のエメリンはWSPUを運営していくだけの力量を備えていたのだろうか。彼女は急進的な両親のもとで育ち、14歳の時、母と初めて婦人参政権の会合に出席して以来、婦人運動に関心を持ち始めた。当時としては大変急進的な思想を持ち、生涯を通して男女の法的平等、女性の権利の運動のために身を捧げた弁護士、Richard Pankhurst (リチャード・パンクハースト)との結婚は、彼女の婦人参政権運動に対する関心を一層強めた²⁸。リチャード、パンクハーストはマンチェスター婦人参政権協会の設立に尽力し、1868年には既婚女性の財産に関する法案 (Married Women's Property Bill) を起草し、更に女性の法的無能力を除去する法案 (Women's Disabilities Removal Bill) として知られている婦人参政権法案を起草し、この法案は1870年にリチャードの友人、Jacob Brightによって下院 (House of Commons) に提出された²⁹。結婚後エメリンは夫の影響の下に、マンチェスター婦人参政権委員会や既婚女性の財産に関する委員会で活躍し、1889年に女性市民権連盟 (Women's Franchise League) を設立した。1892年にマンチェスターの貧民救済施設 (work-

house) の貧民救済委員会の委員 (Poor Law Guardian) に選ばれ、1899年夫が亡くなってからは4人の子供を養うために登記係戸籍吏の職に就きながら、教育委員会や行政委員会の委員や独立労働党の役員も歴任した³⁰。このようにエメリンはWSPU設立までには、様々な社会経験、委員会活動の実績も積み、人望も厚く、WSPUのリーダーとして采配を振るうだけの十分な準備ができていたように思われる。特に貧民救済委員としての体験は、未亡人、未婚の母、貧困のため娼婦に身を落とした女たちの苦しみを目の当たりに見る機会を彼女に与えるとともに、このような惨めな女たちを救出するためには婦人参政権が是非とも必要であることを改めて実感させた。1893年に死去した急進主義者の夫の影響は計り知れないものがあり、また独立労働党との密接な関わりはエメリンに将来役立つ政治的な教育を与えたとも考えられる。

WSPUの結成当初の目的は男性と同様の選挙権を獲得することであり、この目的以外の婦人問題にはかかわらないこととし、会員は女性だけに限定した³¹。今井けいは著書『イギリス女性運動史』の中で、WSPUはNUWSS同様、初めからミドルクラスの女性の運動であったと述べているが、エメリン、シルビア、クリスタベル・パンクハーストの自伝によると、WSPUの結成当初の会員の多くは労働者階級の女性であり、パンクハースト母娘のような中産階級の女性は極めて少数であった³²。WSPUの組織としては公式に独立労働党 (Independent Labour Party) に加盟していなかったが、多くのメンバーはその政党员であった。Blackburn出身の教師 Teresa Billington、Oldham出身の綿花工場の女工 Annie Kenneyとその姉妹、Bolton出身のお針子の Hannah Mitchellなどが極めて早い時期にWSPUの会員となり、WSPUの活動に積極的に加わった³³。設立されてからの最初の3年間、パンクハースト母娘はWSPUのメッセージを広めるためにマンチェスターを中心にランカシャー、ヨークシャーなどを

まわり、婦人参政権の演説を行なった。イングランド北部の紡績工業の盛んな地域にも Hannah Mitchell を演説者として連れていき、婦人参政権の宣伝活動を実施した。工場の入り口において、昼休みに綿工女のための集会を開いたり、婦人参政権のビラを配布したり、一軒ずつ家を回って婦人参政権の必要性を説いたりして、婦人参政権に対する働く女性の意識を高め、WSPUへの参加、支持を促した。Hannah Mitchell は自伝 *The Hard Way Up* の中で当時を回想し、「WSPUの婦人参政権運動は私にとって素晴らしい経験だった。ヨークシャーの労働者階級の女達は私たちの婦人参政権の宣伝活動で活気づき、何百人もが私たちの運動に参加してくれた。……階級差別など重要でないと思わせるぐらい、女たちは婦人参政権実現という同じ目標のもとに一体となっていた。」と述べている³⁴。これらの活動が明らかにしているように、初期の段階ではWSPUは婦人参政権を労働者階級の女性を中心とした運動にし、これらの女性の利益のための政治的社会的活動として進めていこうとしていたことがわかる。エメリンの努力が実り、事実WSPUの活発な運動は労働者階級の女性に大きな影響を与えたにもかかわらず、会員数は伸び悩んでいた。WSPUは独立労働党から財政的援助をある程度受けてはいたが、運営資金も乏しく、経費節約のため、エメリンの自宅が事務所がわりに使われていた³⁵。そしてWSPUの活動はマンチェスター周辺のイングランド北部を中心とした限られた地方都市における婦人参政権運動にとどまり、全国的な運動までには発展していかなかった。しかしWSPUの初期の参政権運動は知的な中流階級の女性と労働者階級の女性が婦人参政権獲得という同一の目的のために共に協力しあい、活動したという点で、大きな意義があったと思う。なぜなら初期の婦人参政権運動は知的な中流階級の女性の戦いであり、労働者階級の女性と交わる接点がなかった。労働者階級の女性は自分たちの労働条件改善のため、労働組合活動を活発に行なってきた。1849年に

Esther RoperとEva Gore-BoothがThe North of England Society for Women's Suffrageという労働者階級の女性のための婦人参政権運動団体を設立したことにより、労働者階級の女性も参政権運動に加わり始めた。しかしこの団体では労働者の女性があくまで中心であり、中流階級の女性との接触が多くみられなかった。この点でWSPUの果たした役割は大きかった。

WSPUは1905年秋に大きな転機を迎えた。WSPUの中心的メンバーであるクリスタベル・パンクハーストとアニー・ケニーの2人は他の婦人参政権運動の団体が今までとったことのない行動にでた。2人は1905年10月13日にマンチェスターのFree Trade Hallで開かれた自由党 (Liberal Party) の大集会に参加し、「自由党は政権を握ったら、女性に選挙権を与えるのか」という質問を大声で何度か叫んだが、無視され、最後に2人はホールから追い出された。2人は街頭においても同じ質問を叫び続けたため、警察がやめるように命じたにもかかわらず、ケニーは警察に対して乱暴な振る舞いをした。クルスタベルにいたっては、止めにかかった警察官に唾を吐きかけたり、殴ったりした。2人は公務執行妨害と過激な行動のかどで逮捕され、罰金刑に処されたが、罰金を払うのを拒否したため、ケニーは3日間投獄され、クリスタベルは10日間投獄された³⁶。どうして2人はこのような前代未聞の過激な行動にでたのか。理由は、クリスタベルは従来のような法を犯すことのない穏便な方法では彼女らが打ち込んでいた婦人参政権獲得運動はいつまでたっても日の目を見ないと悟り、警察に逮捕され、投獄されるぐらいの過激な行動にできれば、この運動に英国全土の多くの人々の注目を集めることができるのではないかと思ったからである。クリスタベルの思惑どおり、この2人の前代未聞の'unwomanly'(女らしくない)振る舞いはマスメディアの格好の材料となり、新聞はこの事件を書き立てた。とりわけ上品な服装をした淑女が会場整理の武骨な男性

により会場から荒々しく投げ出される写真は、ビクトリア時代の上品な女性観に慣れた世間の人々に衝撃を与えた。またWSPUはその当時組織の財政の乏しいマンチェスターを中心とする地方団体にすぎず、その名前は全国的にはほとんど知られていなかった。しかしこの事件は全国版の主要新聞においても広く報道されたため、WSPUにとっては費用の全くかからないよい宣伝となったことは確かである。このことに味をしめたクリスタベルはただの宣伝手段を最大限に活用していった³⁷。

この事件後もWSPUのメンバーたちは当時総選挙のために数多く開かれていた選挙演説会場で国会議員（特に次に政権を握るであろうと予想されていた自由党の有力候補者）に対して、閣僚となった時には「婦選」を主な政策目標として取り上げるかという詰問戦術を取り続けた。その結果WSPUの女性達は‘militant suffragist’（法制上の変化を押し進めるには直接的な行動が必要だと信じる過激派あるいは戦闘派の婦人参政権運動家）と呼ばれるようになり、彼女らを言及する‘suffragette’（サフラジェット、過激派あるいは戦闘派）という新しい言葉が1906年1月10日の*Daily Mail*紙の中で初めて用いられ、フォーセット婦人の率いるNUWSSのように婦人参政権は合法的な手段によってのみ獲得されるべきであると主張する‘suffragist’（サフラジスト、合法派あるいは穏健派）という言葉と区別して使われるようになった³⁸。

4. WSPUの第2期——WSPUの本部のロンドンへの移転

1906年の総選挙で保守党内閣が退陣し、自由党が圧勝し、政権を握った。婦人参政権運動に携ってきた女性達はこの政権交代は自分達に有利な新しいアイデアや政策を生み、婦人参政権が実現する日も遠くないと考え、自由党に大きな期待をかけ始めた³⁹。1906年5月にWSPU、NUWSS

をはじめ他の婦人参政権論者代表300人以上がHenry Campbell-Bannerman新首相に面会した時、彼女らは婦人参政権運動の趣旨を述べ、婦選の実施を強く要請した⁴⁰。これに対して首相は「自分は個人としては婦選に賛成であるが、自由党の中では賛成派と反対派に大きく意見が分かれてしまっている。だからもっと多くの政治家たちに賛成してもらえるように請願し続けることだ。」と提案した⁴¹。このような首相の「ひたすら忍耐の徳を説く」にすぎない逃げ腰の回答は自由党を長い間支持し続けてきたNUWSSの代表フォーセット夫人をも失望させた。しかし、彼女はくじけることなく、今までより積極的な集会、署名、ロビー活動を行った。更にNUWSSはこれまでは自由党の立候補者の選挙活動を応援してきたが、これをやめ、婦選反対の自由党議員に対抗できるような、婦選支持の無所属の候補者を自分たちでみつけ立候補させ、応援するというような、新しいもっと積極的な行動にでた。

一方WSPUは1906年の末には彼女らの婦選運動に対する国民の関心を最大限に高めるため、運動の拠点をつま地方都市マンチェスターから首都であり、国会も開催される政治の中心地であるロンドンに移した。ロンドンの本部は2部屋しかない狭いものであったが、StrandのClement's Innの4番地という所在地は、新聞社が立ち並ぶFleet通りや法廷に近く、ウエストミンスターの国会議事堂からも比較的近い距離にあるという婦選活動には最適と思われる場所に位置していた⁴²。

WSPUはマンチェスター時代、独立労働党と密接な関係を維持し、労働党議員の選挙活動の支援も行ったが、この政党が婦選ではなく成人選挙権を求めていることがわかると、ロンドンへの移転を機に労働党とも絶縁した⁴³。

‘Deeds not words’「言葉ではなく行動に移せ」がWSPUの新しいスローガンとなり、過去のように政治家が婦人参政権支持の行動にでるのを受

動的に待つのではなく、女性自らが直接行動にでて、法制上の改革を押し進めていくという新しい方針を取るようになった。この言葉通り、ロンドンの本部から WSPU のいろいろなプランが実行に移された。それでは一体 WSPU は具体的にどのような運動を展開していったのであろうか。婦人参政権反対の政治家たちは英国国会議員の補欠選挙の間 WSPU のメンバーによって選挙演説の邪魔をされたり、妨害されたりした。WSPU の集会の知らせは歩道にチョークで書かれ、大規模な屋外、屋内の集会が催され、プロパガンダが書かれ、英国中に配布された。国会に代表団を送ったり、デモを実施したりした。工場の表玄関で昼休みに会合を開いて、労働者階級の女性を WSPU の新しい会員に引き入れたり、1906 年に労働者の多く住む波止場地域である Canning Town に WSPU の最初のロンドン支部を開設したりもした⁴⁴。全国的な婦人参政権運動を実施するためにはもちろん多くの資金と人手が必要であった。WSPU はどのようにして資金集めをし、会員数を増やしていったのであろうか。WSPU はバザーや展覧会を催したりして資金集めをしたり、ボランティアを募る運動も活発に行なった。公の場での婦人参政権運動の演説を希望するものにはパブリックスピーキングの指導をしたり、警察からひどい暴力をうけた際、自分の身を守るための柔道のレッスンまで提供したりした。毎週本部で開かれた 'At Homes' と呼ばれる会合や毎週発行された *Votes for Women* という機関誌の中で WSPU の日々の活動の詳細を会員に提供し、また新しい会員も募集もした⁴⁵。また全国的な婦選運動を展開するためには多額の資金が必要であったため、資金集めのために大々的な寄付金募集を行ったが、マンチェスター時代のような労働者階級中心の女性団体のままでは資金は思うように集まらないと実感したため、金銭的援助を積極的にしてくれそうな中産階級、上流階級の女性会員の獲得にも力を傾け、成功を収めた⁴⁶。上流階級の女性たちは宝石類などの高価な品物を寄付してくれ、それらは

運動資金にするため売り捌かれた。更に WSPU は英国中の都市や町に WSPU の店を多く開店し、‘Votes for women’ というブランドのチョコレート、紅茶、ママレードなどの人気商品をはじめ様々な種類の品物を販売し、店の売上金も資金活動にまわされた⁴⁷。

エメリンの次女シルビアは WSPU の専属芸術家となり、女性の展示会を催したり、WSPU の会員証、ポスター、バッジ、旗、Holloway バッジやさらにはサフラジェットティーセットまでのデザインを担当したりした。これらのものを販売して売上金を資金にまわした。そして更に WSPU の会員の多くは外出するときには WSPU のトレードマークの3色（威厳を表わす紫、純潔を表わす白、将来への希望を表わす緑）を身に纏っていたため、彼女らの装いは人目につき、彼女らの行動は大衆の注目を集めるようになった⁴⁸。

1906年10月23日に国会が開催されると、WSPUの会員たちは婦選を主な政策として国会で直ちに論議してくれるように下院に押し掛けて行ったが、彼女らの要請は受け入れられなかった。それに怒った数人の WSPU の会員たちは抗議の演説をするために下院の控え室の椅子に上り、残りの女たちはスクラムを組んで、椅子の周りを防御した。警察が呼ばれ、10人の会員が脅迫的な言葉を吐き、平和を乱すような振る舞いをしたかどで逮捕された⁴⁹。彼女らは全員罰金刑に処されたが、罰金の支払いを拒否したため、2ヶ月間投獄された。この事件も新聞で大きく取り上げられ、WSPUの活動を世間に知らせる格好の宣伝となり、宣伝費用も全くかからなかった。その結果多くの会員が WSPU に新しく入ることとなった。

この時期における WSPU と NUWSS の関係はどんなものだったのか。また NUWSS の人々は WSPU の活動をどのように受けとめていたのだろうか。WSPU と NUWSS は婦選運動の政策やスタイルの点では異なっていたが、WSPU の初期にはお互い婦選実現という共通の目標のために、

協力し合った。NUWSSのリーダーのフォーセット夫人はWSPUの初期の活動について次のように述べた。「WSPUの大胆で挑戦的な戦法は他の団体の婦選運動にまでダメージを与えたとかくいわれがちだが、私個人の意見としては、ダメージなど与えたわけではなく、私たちが根気強く行ってきた長年にわたる婦選運動であげた成果よりずっと大きな成果をこの12ヶ月という短い期間にWSPUは成し遂げた」と高く評価した⁵⁰。WSPU設立以前の婦人参政権運動は沈滞していたが、それをWSPUの活動は見事に打破したといっても過言ではない。事実婦選運動が始まって以来、ほぼ50年という長い歳月がたち、はじめて「婦選」が極めて重要な問題として新聞で頻繁に取り上げられるようになり、世間の注目を浴びるようになったのはWSPUの華々しい過激な戦法によるところが大きいと思われる。

5. 分裂とWomen's Freedom Leagueの設立

ロンドンに移転してから順調に会員数を増やしていたWSPUが最初に直面した難題は連合内の分裂であった。たとえWSPUの全ての会員が婦人参政権実現という同じ目的のために戦っていても、個人個人の異なった意見が衝突を招くことは避けられなかった。婦人参政権獲得のための闘争はWSPUの多くの女性にとっては生と死をかけた闘いであったため、時には感情が高まり、緊張を緩和することが出来ず、意見の相違が表面化した。1907年の秋までにWSPUの中にも大きな変化が見られるようになった。エメリンとクリスタベルの指導者としての行動はTeresa Billington-Greig、Charlotte Despardなどの古参の会員によって激しい非難を受けるようになった⁵¹。まず2人はロンドンに拠点を移してから、WSPUは労働者階級の女性に背を向けるようになり、上流階級や富裕な女性との親交を

深めるようになったとパンクハースト母娘を非難した。また Billington-Greig は WSPU はパンクハースト母娘の意のままに運営されるべきではなく、民主化体制を取るべきであり、支部は本部から独立する必要もあるべきだと主張した。更に彼女は WSPU のために民主的な規約を起草し、それを WSPU の年大会で提案しようと試みた。大会前に規約をパンクハースト母娘や他の会員に見せたところ、彼女の提案は多くの会員の支持を得たが、パンクハースト母娘の怒りにふれた。エメリンは規約を会員の目の前で破り捨て、彼女と娘のクリスタベルの政策に賛成する会員だけからなる新しい中央委員会を設置した。クリスタベルがその組織責任者になり、シルビア・パンクハーストを秘書に、Emmeline Pethick Lawrence を会計に任命し、アニー・ケニーを有給の組織者として雇った。WSPU の政策はこの中央委員会によってのみ決定し、ロンドンの本部で毎週月曜日に開かれた 'At Homes' という会合の間に他の会員達に一方的に報告された。したがって他の会員たちは政策決定に関わることが全く出来なかった。このようにして WSPU はライバルの NUWSS のように民主的な組織からは程遠い、パンクハースト母娘の独裁的な男嫌いの女性集団へとなっていた。パンクハースト母娘の一方的なやり方に腹を立てた Teresa Billington-Greig、Charlotte Despard は WSPU の 5 分の 1 の会員を引き連れて女性自由連盟 (Women's Freedom League、以下 WFL と略) という新しい民主的な婦選運動の連盟を結成し、機関誌 *The Vote* も発刊した⁵²。それでは WFL は WSPU とどんな点で違っていたのか。WFL は極めて戦闘的な不法行為を行なう WSPU と、法を順守する NUWSS の中間に位置する婦選運動団体となるが、WSPU が持っていたような独特なイメージを確立することはできなかった。WFL はどの政党も支持しないと言いながらも労働党に対して忠誠をつくし、選挙の時などは労働党の候補者の選挙運動を助けた。WFL は短期間に成長し、1914 年までには英国全土に 60

の支部と約4,000人の会員を持つ団体へと成長していった。

6. WSPUの急成長

WSPUの内紛の結果、組織の多くの会員がやめて、WFLに移っていったにもかかわらず、1906年から1910年の間にWSPUは驚くべき急成長を遂げた。ロンドンに移転した当初はKeir Hardieなどの独立労働党の政治家とまだ密接な関係を保ち、ロンドンのイーストエンドの労働者階級の女性も婦人参政権の請願運動に積極的に参加していた。しかしWSPUが独立労働党からの独立宣言をしてからは、労働者階級のメンバーは減り、逆に中流、上流階級のメンバーが多くなってきた。なぜこのような現象がおこったのだろうか。WSPUは労働者階級の女性の組織というそれまでのレッテルがはずされたことにより、また独立労働党との政治的なつながりがなくなったことにより、あらゆる社会階級、様々な政党を支持する女性がWSPUに歓迎されるようになったからだと思われる。日々生活苦と闘っていた労働者階級の女性とは違い、時間と金銭的ゆとりのある中、上流階級の女性はWSPUの運動に身を捧げるようになった。その結果1906年3月には3つしかなかった支部が1911年の末までには122まで増えた⁵³ (図1)。何百人にも及ぶボランティアも得て、WSPUの運動資金も多く集まり、WSPUの年収は1906-1907年の2,900ポンドから1909-1910年の33,000ポンドまで増大した⁵⁴。年収の増加に伴い、有給の事務職員の数も1919年春までには75人に及んだ。1907年に創刊し、毎週出版されたWSPUの機関誌*Votes for Women*の発行部数も1909-1910年の間にはピークに達し、週およそ40,000部も売れ、読者数は少なくともその4倍と言われていた⁵⁵。支部の増加に伴い、WSPUの婦人参政権運動は全国的で大規模な運動へと発展していった。

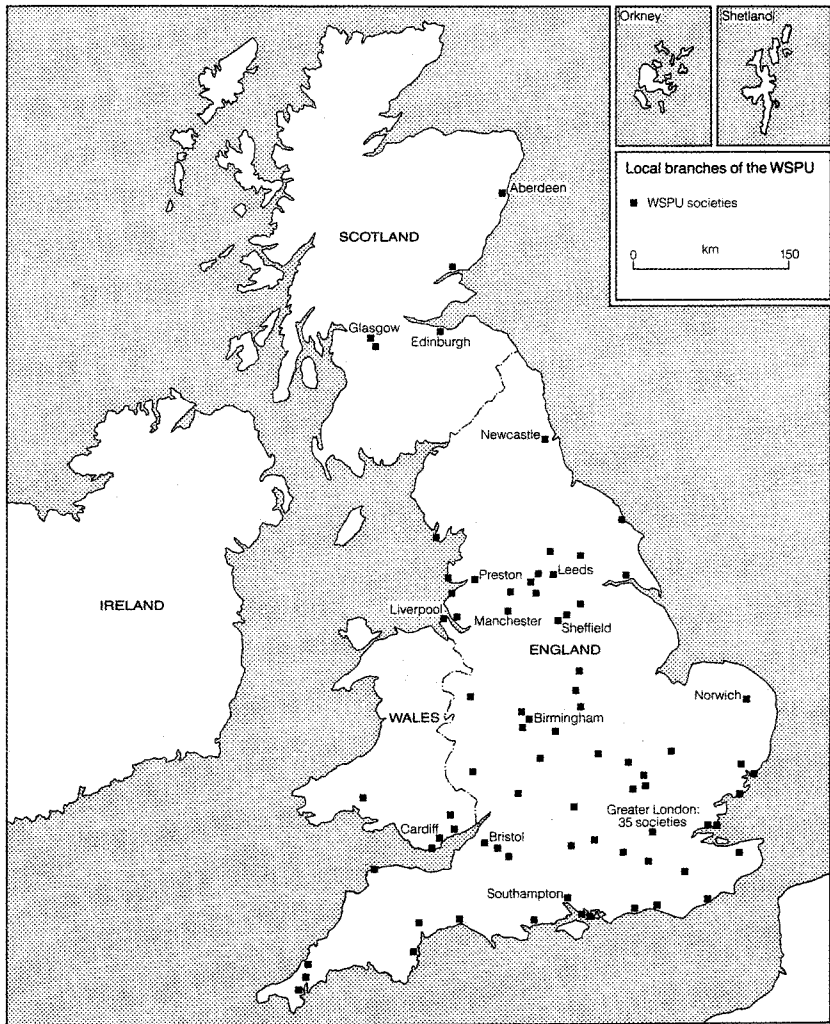


図1 WSPUの支部があった地域

7. 婦選反対者 Asquith 首相の誕生と WSPU の運動

1908年4月に Henry Campbell-Bannerman が亡くなったことにより、同じ自由党でそれまで大蔵大臣を務めていた Herbert Henry Asquith が首相の座を受け継いだ。この首相交代は WSPU にどのような影響をもたらしたのだろうか。Asquith は婦人参政権運動の反対者としてよく知られており、首相に就任した際も、日々活発になってきている婦人参政権運動を無視したような発言をした。彼は「大部分の女性は参政権を望んでいないという私の意見が間違っていて、多くの女性が実際参政権を心から望んでおり、女性が参政権を獲得することにより、地域社会に利益を生むことが証明されれば、私の婦選反対の考えを捨て、国会において婦人参政権法案を審議する。」と述べた⁵⁶。この Asquith の発言に対して、WSPU も NUWSS もロンドンや他の主要な地方都市において大集会を催した⁵⁷。まず1908年6月14日に NUWSS がロンドンの Embarkment から Albert Hall まで婦人参政権運動のデモ行進を計画した。この行進には英国全土から10,000人の女性が婦選獲得のスローガンを掲げる多くの旗を持って行進し、行進の最終目的地 Albert Hall では婦人参政権の緊急な必要性を説く演説が行われた。その1週間後の6月21日には WSPU がロンドンのハイドパークにおいて「女性の日曜日」と題する大集会を開いた⁵⁸。50万人以上の群集が押し寄せ、英国全土から集まった WSPU の会員の女性が Votes for Women というスローガンの書かれた旗を700本以上掲げてハイドパークまで行進した。集会の終わりには、「WSPU のメンバーはこの集会をもって女性に対して速やかに参政権を与えるよう政府に要求する」との決議文が読まれた。事実2つの大集会は多くの大衆の関心を引き、いかに多くの女性が婦選を心から望んでいるかということを証明した⁵⁹。

しかし Asquith は約束を守らず、WSPU の決議文に否定的な回答をだ

し、依然として婦選反対の姿勢を頑なに維持した。パンクハースト母、娘は、大集会もデモ行進も政府を動揺させることが出来ず失望した。また2人は6月21日以上のデモは将来まず実行不可能という従来の合法的手段の限界を実感させられた。と同時にもはや婦選実現のために残された道は、戦闘的な手段に訴えるしかないという結論に達した。それまでもWSPUのメンバーたちは政治集会などで婦選反対を唱える政治家たちを野次るような反抗的な態度は取ってきたが、暴力に訴えることはそれまでほとんどなかった。しかし、1908年6月30日にロンドンのParliament SquareでWSPUがデモを企画した時、何千もの婦選支持者がデモに参加したため、群衆の安全確保という理由で5千人の警察官が送られた⁶⁰。結果的には幾人かの警官がWSPUのメンバーに暴力を振るい、それに怒ったWSPUの2人の会員Mary LeighとEdith Newが首相官邸のある10 Downing Streetまで行き、首相官邸の窓ガラスに石を投げつけた。この日27人の女性が逮捕され、LeighとNewの2人はHolloway刑務所で2ヶ月間服役した⁶¹。

この事件を契機にして、WSPUのメンバーによる投石での政府関係建物の窓ガラス破壊事件が次々に起こった。またWSPUの会員が首相官邸の外の鉄柵や下院の女性用傍聴席の格子に鎖で体を縛り付けることを敢行したりもした⁶²。多くのWSPUの女性はこのような過激行動のため逮捕され、ほとんどの女性が罰金を支払うのを拒んだため、Holloway刑務所や他の刑務所に投獄された⁶³。

8. ハンガーストライキと食餌強制

刑務所においてWSPUのメンバーはハンガーストライキを始めた。どうしてこのようなことが起こったのだろうか。投獄されたWSPUのメン

バーのほとんどは普通の犯罪者と同様の悪い扱いを受けたため、政治犯としての待遇を要求し抗議したが、受け入れられなかった⁶⁴。そのためWSPUの一会員は抗議の戦術としてハンガーストライキに入り、政治犯としての待遇を獲得するまで断食を宣言した。このように初めは個人的に行われたハンストが直ちにWSPU公認の政策となり、投獄されたWSPUのほとんどのメンバーが刑務所においてハンストを行うようになり、刑務所もまた彼女らの戦闘の場と化した⁶⁵。政府は彼女らが刑務所で餓死するのを望まなかったので、最初のうちはハンストに入り、生命に危険が生じた場合は釈放するという措置を取った。その数ヵ月後、政府はハンスト戦術に対する直接の対応策としてforce-feeding（食餌強制）を導入した⁶⁶。断食をして、体に危険が生じた女性の喉に無理やりチューブを挿入し、お粥状の食べ物を流し込むという手段が取られた。WSPUのメンバーは食餌強制を「暴行」と非難し、このような過酷な仕打ちに対して政府に抗議した⁶⁷（図2）。しかしWSPUのメンバーの政治集会における嫌がらせ、

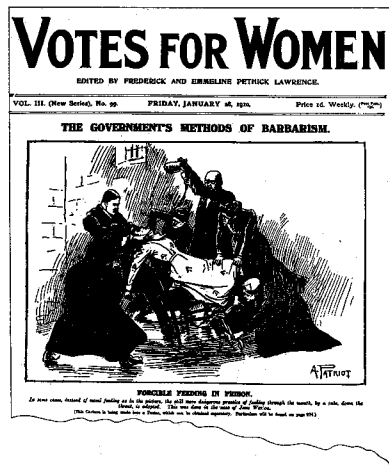


図2 食餌強制の場面を描いた1910年1月28日のVotes for Womenの表紙

野次や投石、政府の建築物の窓ガラス破壊、警察に対する乱暴行為など彼女らからぬ行動に立腹していた Asquith 首相や古参の政治家たちは、彼女らの要求に表立った敵意を示した。一方、一般大衆は食餌強制の苛酷さに対して同情を示し、同情者の中には WSPU のメンバーになるものもでてきた。この点で WSPU の食餌強制への非難が会員獲得に一役かったとも言えるだろう。

9. 調停法案と休戦

1910 年になると婦人参政権のための全党調停委員会 (Conciliation Committee) が設置され、委員会は「調停法案」を作成した。ここまで婦人参政権運動が前進した理由としては、WSPU の過激な運動がメディアの注目を集めて一般大衆の関心を得ることに効果的であったことと、WSPU と NUWSS の共同戦線が実を結んだことがあげられる。この法案に望みを託したエメリン・パンクハーストは WSPU の全てのメンバーに戦闘的な活動を中止するよう休戦宣言をした⁶⁸。この法案は 1910 年 7 月には国会で第 2 読会まで通過したが、時間切れとなり、11 月の国会まで持ち越しとなった。更に 11 月の国会においてもこの法案は Asquith 首相によって無視され、論じられることはなかった。このことに怒った WSPU の 400 人以上のメンバーは 1910 年 11 月 18 日に休戦をやめて、下院において抗議のデモをおこした。このデモは警察官との間の暴動へと発展した。その日は彼女らの扱いに慣れていたいつもの警官ではなく、比較的貧しい生まれのタフで乱暴な警官が出動した。かれらは今までにはみられないほどの暴力で応酬し、WSPU のメンバーを蹴ったり、殴りつけたり、性的暴行を加えたりした。その結果 150 人以上の女性が肉体的または性的暴行を受け、死傷者もでて、この日は「黒の金曜日」(Black Friday) と呼ばれ

た⁶⁹。

この後 WSPU はまた 1 年近く休戦し、1911 年には調停法案が法律となることに望みをかけた。WSPU のメンバーは当時政権を握っていた自由党反対の姿勢を和らげ、平和的な手段で婦人参政権獲得のためのデモ行進を定期的に行った。しかし 1911 年の秋、大蔵大臣の Lloyd George が NUWSS のメンバーに調停法案をあきらめるようにと一方的に述べたことを知った WSPU は激怒し、休戦をやめて、今までにみられなかったほど過激な行動にでた⁷⁰。「黒の金曜日」での苦い体験の後、WSPU のメンバーは警察官との直接的な衝突を避け、窓ガラスをわったりその他の所有物を破壊する方法を取ったりするようになった⁷¹。

9. WSPU の第 3 期——エスカレートしていく過激な行動

1913 年エメリン・パンクハーストが WSPU のメンバーは正当な根拠のもとに闘争の手段を取らざるをえない「ゲリラ」であると宣言してから、WSPU の婦選運動はますます過激になり、新展開を見せ始めた。それまでは投石、窓ガラスの破損は政府の建物に限られていたが、1913 年以降は私有物、公共物に関係なく投石し、商店や官庁街の窓ガラスを壊すようになった。また競馬場でスローガンを焼いたり、ゴルフ場の芝生を焼いてゴルフが出来ないようにしたり、電話線を切断したり、郵便ポストの中に化学薬品を注入して、何千もの手紙を台無しにしたりした。また公私の所有物、財産の損害と破壊政策も取り始め、駅、教会、スポーツのパビリオン、個人の家（とりわけ空き家）などに放火したり、爆弾を仕掛けたりした⁷²。1913 年 2 月には政治家ロイ・ジョージの新しくサリー州に建てられた邸宅が Emily Wilding Davison によって仕掛けられた爆弾によって大きな被害を受けた⁷³。どうして WSPU はここまで過激な行動を起こしたの

か。その理由としてはWSPUは民衆の暴動が第1次（1832年）、第2次（1867年）の選挙法改正をもたらしたと考え、暴動の重要性とその効果を高く評価していた。したがってWSPUの過激な行動がエスカレートすることによって、民衆は激怒し、暴行をやめさせるためには女性に参政権を与えるべきだと政府に強く迫る状況となる。そうすれば政府は危機を乗り越えるために女性に参政権を与えざるをえなくなるというのがWSPUのもくろみであった。

このような過激な行動がエスカレートするに従って、刑務所に送られるWSPUのメンバーの数も益々増えてきた。彼女たちの多くは刑務所において、政治犯としての待遇を受けていないことに抗議して、ハンガーストライキ戦術を続けたため、それに対して政府はチューブなどを用いて強制的に女性の口からお粥などを流し込むという手段を初めのうちは続けた。その結果WSPUの女性たちによって食餌強制を非難しなかった医師たちは家の窓ガラスを壊され、ホロウェイ刑務所で働く医師たちは通勤途中、ムチをふりまわすWSPUの女たちに攻撃された。WSPUの女性たちの中には食餌強制の結果、極度に健康を害するものや釈放後亡くなるものまで出てきた。政府の食餌強制は女性に対する虐待であるというWSPUの訴えは世間の同情を集め、大衆の抗議の声も高まってきた。それに対応して政府は、1913年4月にThe Prisoners' Temporary Discharge for Ill-Health Act（疾病囚仮出獄法）を制定した⁷⁴。この法律は、ハンガーストライキなどの自分自身の行為によって健康を損ねた囚人を健康回復のために仮釈放し、健康が回復したら、刑務所にもどし刑期を終えさせるが、仮釈放の期間は刑期に含まれないというものであり、俗称「猫とネズミ法」と呼ばれていた。つまりネズミのようなWSPUの女たちを猫である政府は捕まえ、それから女たちを逃がし、また捕まえるといったものであった（図3）。しかしこの法律は効果的ではなかった。なぜなら仮釈放された

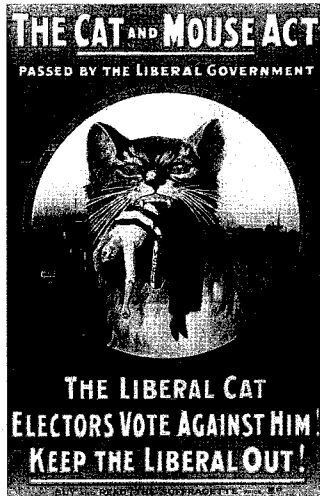


図3 女性をネズミにたとえた「猫とネズミ法」に関するWSPUのポスター

WSPUのメンバーたちは仮釈放中にまた新たな戦闘的な活動に従事し、その上再逮捕も逃れる場合が多くなってきた。そのため、1913年10月、刑務所の職員たちは囚人たちを釈放せず、食事を強制的に取らせる手段をまた実施し始めた⁷⁵。

またWSPUの中には婦人参政権運動を勝利に導くために自らの命を投げ出す者まででてきた。オックスフォード大学とロンドン大学の学位を持つ教師であったEmily Wilding Davisonは1906年にWSPUの会員となって以来、熱狂的な闘士となった。政治家への野次演説から投石、窓ガラスの破壊、ポストの放火、爆弾を用いての建築物崩壊に至るまでWSPUの戦闘的な活動に積極的に参加した。また1912年のホロウェイ刑務所でハンガーストライキ中に階段から飛び降りて自殺を図った。更に1913年6月にサリー州のEpsomのDerby競馬場にWSPUの旗を縫いつけた上着を

まとして出かけて行き、レース中にコースを走る英国王の馬アンマーの真正面に飛び出し、馬に蹴り倒され、頭蓋骨骨折の重傷を負い、病院に運ばれたが亡くなった⁷⁶。彼女の行動はパンクハースト母娘によって是認されたものではなく、エミリーは婦人参政権運動に勝利をもたらすのではないかという自身の判断のもとにこのような突飛な行動を起こしたのだった。WSPUのメンバーたちは彼女の予期せぬ行動に驚いたが、豪華なお葬式を催した。WSPUの色である緑、白、紫の3色の旗で覆われた彼女の棺は、9つの楽隊と緑、白、紫の3色の衣装をまとった2,000人以上のWSPUの会員に付き添われてピクトリア駅からブルームズベリーのセント・ジョージ教会まで行進した⁷⁷。彼女は自分が死ぬことによって婦人参政権がもたらされることを期待していたが、それは実現しなかった。しかし彼女の死は世間の注目と共感をWSPUのメンバーに大いに集めることに成功した⁷⁸。

更に1914年2月にはWSPUのメンバーのMary Richardsonがナショナル・ギャラリーに展示されていたスペインの画家ベラスケスのビーナスの名画をナイフで切り裂くという事件を起した。英国の新聞『デイリーミラー』紙は大見出しで、“Slasher Mary Suffragette Slashes £45,000 Venus”と報道した⁷⁹。彼女は18ヶ月服役し、この事件の後、英国中の美術館や博物館の中には一般の見学を一切禁止するところや女性の入場を認めないところも出てきた。

第一次世界大戦直前の17ヶ月間の放火闘争は大きなものだけでも100件近くあり、その推定被害額は45万ポンド以上に上ると言われていた。WSPUの一連の破壊政策は実際いかなる効果をもたらしたのであるろうか。結果的にWSPUの戦術は過激ではあったが、婦人参政権の法案通過を実現させるほど政府を動かすことはできなかった。なぜならWSPUのメンバーたちは人間の生命を尊重したので、物質的損害を与えても人命に対し

ては危害を加えなかった。このポリシーを政治家たちは知っていたから危機感はなかった。WSPUの過激な行動はWSPUの評判を甚だ悪くし、ほかの婦人参政権団体からも白い目でみられるようになり、孤立していった⁸⁰。たとえばフォーセット夫人率いるNUWSSはWSPUと過去には共同戦線を取ることもあったが、エメリン・パンクハーストがWSPUのメンバーは正当な根拠のもとに闘争の手段を取らざるをえない「ゲリラ」であると宣言してから、両者の関係が断ち切れた。法に従って婦人参政権運動を展開してきたNUWSSのメンバーと法を破り暴力に訴えるWSPUのメンバーとの区別が一般の人々には容易に出来なかったため、NUWSSもWSPUと同様暴力に訴えるのではないかという非難も受け、大変迷惑した。またNUWSSは政府と協力して一部の女性にも選挙権を与えるという改正法案を国会で通過させようと地道な努力を重ねていたが、WSPUの過激な行動のため、その法案は1913年に却下されてしまった。また刑務所でハンガーストライキを実施したWSPUの女性に対する政府の食餌強制に初めは同情した一般大衆も、彼女らの私有物、公共物に関係なく投石したり、爆破したりするという行動が日に日にエスカレートしてきたことに対して強い怒りを覚えるようになった。当時の内務大臣、Reginald McKennaに手紙を書き、ハンガーストライキを刑務所で行う女たちには何もせず、そのまま餓死させてしまえとか、彼女らを国外へ追放せよとか、精神異常者として扱えというような提案をする者も多くなってきた⁸¹。また自分たちの家や店の窓ガラスを何の理由もなくWSPUによって壊されたり、家を放火されたりした人々の怒りは頂点に達し、WSPUへの復讐を試みる者まで出現した。Bristol、Birmingham、NewcastleのWSPUの店は一般市民によって襲撃され破壊された⁸²。しかしこのような民衆、政府の厳しい非難、攻撃にもかかわらずWSPUのメンバーたちはただひたすら男性と平等な参政権獲得という目的を追求し続けた。

10. WSPUの第4期——第一次世界大戦と婦人参政権獲得

WSPUの闘争的な運動は最終的に成功を収めたのか。またいつどのようにして終わったのか。WSPUの過激な運動は直接的には婦人参政権をもたらさず、1914年8月の第一次世界大戦勃発によって終わった。8月10日に政府がWSPUの囚人たちを全て釈放すると、エメリン・パンクハーストと娘のクリスタベルは今までの過激な行動だけでなくすべての婦選活動を突然中止した。どうして2人はこのような極端な行動にでたのであろうか。2人によると、彼女たちがそれまで勝ち取ろうと一生懸命続けてきた婦選運動が、もしもドイツが勝利すれば、泡と消えてしまうのであろうと考え、ドイツに勝つことの方が当面優先すべき重要事項であると判断したからだと言っている。しかしこれは表向きの理由であり、事實は1911年の秋以降WSPUが続けてきた過激な闘争が精力、財力ともに限界をむかえ、これ以上続けられる状況ではなかったのではないかという解釈もできよう。また新聞報道も大戦の経過が中心となり、一般大衆の目もそちらへ向けられていった。このような背景の中で、婦選活動を続行しても効果は得られないとWSPUのリーダーは悟り、大戦が終了するまで、WSPUの精力と財源を節約しようと思ったのではないだろうか⁸³。とにかくWSPUは戦争協力へと方向を転換し、WSPUの集会で出る話題や演説は戦争の危機とか危険なドイツというような反ドイツ一色のものへと変わり、戦争に勝つためには他の全ての問題を凍結すべきとした。また軍需工場などで働く女性を募集する運動を主導し、軍需省からWSPUの働きに対して2,000ポンドが授与された。1917年にWSPUはWomen's Party（女性党）と改名し、機関誌を*Britannia*（『ブリタニア』）とした⁸⁴。この機関誌は戦争一色で、愛国心の重要性を説き、戦争反対主義者やストライキを始めた女性たちを非難し、軍需工場における女性労働者の重要性と彼女ら

の貢献を称えるというような記事ばかりで、婦人参政権運動に関するものは見られなかった。政府の戦争支援という WSPU の政策変化に伴い、会員数は激減した⁸⁵。

NUWSS のリーダーのフォーセット夫人も戦争勃発に伴い、‘Women, your country needs you. Let us show ourselves worthy of citizenship, whether our claim to it be recognised or not.’ というような愛国心を表わす声明を発表し、婦人参政権運動を中止し、政府に対する戦争救援活動に没頭するよう NUWSS のメンバーに呼びかけた。中には戦争反対者もできて、NUWSS も分裂に至った⁸⁶。

シルビア・パンクハーストをはじめとする WSPU を去ったサフラジエットたちの多くは戦争反対を唱え、婦人参政権運動を戦争中も続けた。シルビアが 1914 年に設立した East London Federation of Suffragettes (婦人参政権論者の東ロンドン協会) は The Worker’s Suffrage Federation (労働者の婦人参政権協会) へと 1915 年に改名した。この団体は戦争中、婦人参政権運動ばかりでなく、戦争によってひどい被害を被った East End に住む極貧の人々のために実践的な援助を提供した⁸⁷。たとえば夫が出征中の妻と子供たちに無料で診療やミルクや衣類を提供したり、安い食堂を設置したり、戦争のため失業した女性たちを雇う小さな工場を設立し、The Worker’s Suffrage Federation がこれらの資金援助を行った。また早い時期に WSPU を辞めて Women’s Freedom League を設立した Charlotte Despard も第一次世界大戦の勃発にショックを受け、英国がこの戦争に参加したことを非難し、戦争反対のデモを行うとともに、婦人参政権運動を戦中もし続けた⁸⁸。

戦争中は労働者階級の女性ばかりではなく、中流階級、上流階級の女性も戦争支援の仕事に就き、1918 年に戦争が終わるまでには、戦前と比べておよそ 100 万人もの女性が新しく仕事に就くようになった⁸⁹。戦前は女

性には出来ないと思われていた多岐にわたる仕事に女性が従事するようになり、女性は心身共に劣るという既成概念が間違っていたことを証明すると同時に、社会における女性と男性の役割についての従来の考えを覆した。戦争中の女性たちの目覚ましい活躍ぶりとは彼女たちが果たした重要な役割は、戦前の婦人参政権反対者でWSPUの戦闘的な婦人参政権運動に対しても動じなかった政治家たちをも心変わりさせたのも事実である。1918年1月に選挙改正法が立法化され、30歳以上の全女性に投票権が与えられることになった。その10年後の1928年には年齢制限が男性と同じ21歳にまで引き下げられた。また女性が国会議員となったり、弁護士になったりすることも可能となった⁹⁰。戦後の婦人参政権の実現は戦中の女性の銃後の貢献に対する政府のご褒美であったと論じるのは短絡的である。戦前におけるWSPUやNUWSSの活発で強固な婦人参政権獲得運動という土台があったからこそ実現されたものだと私は思う。

クリスタベル・パンクハーストは戦後議員に立候補したが落選し、パンクハーストが率いた女性党は1919年に解散した。1920年以後のクリスタベルの生活はキリスト教一色に塗りつぶされ、余生をアメリカで布教活動をして過ごした⁹¹。母エメリンは戦後カナダに渡り、児童福祉に関する講演などを行ったが、1916年に帰国した後は保守党に入党し、ロンドンのホワイトチャペル地区で有力な議員候補者となったが、1928年に亡くなった⁹²。

11. おわりに

WSPUの婦人参政権運動の収めた成功、持っていた弱点、英国女性史において果たした役割、英国国内、世界の婦人参政権運動に及ぼした影響について最後にまとめてみたい。英国における婦人参政権運動はWSPU

が設立される40年以上も前から行われてきていたが、全国的な規模には発展しなかった。しかしWSPUの過激な行動はクリスタベル・バンクハーストの予想通り、メディアの関心を広く集め、新聞などで盛んに書かたてられた。『タイムズ紙』などには1906年以降、婦人参政権の賛否を論じる記事や読者からの投稿も激増した。その結果、WSPUに関する多くの論争を招いたばかりでなく、世間の注目を集め、着実に会員の数を増やしていき、英国中の大きな都市に支部を持ち、巨額な資金を集めることもできるようになった。事実WSPUのメンバーによる婦人参政権運動のメッセージは、英国中に行き渡ったばかりでなく、ヨーロッパ、アメリカにまでも届いた。第一次大戦以前にはWSPUの支持者はパリでもウィーンでもニューヨークでもWSPUの機関誌を購入することが可能となった。またWSPUは女性にも資金集めや大規模な宣伝活動、請願活動、デモ行進などを実施する能力が十分にあり、また戦闘的な暴力、破壊行為を行うだけのエネルギーもあるということを自ら実証した。事実WSPUの戦闘的な運動は沈滞していた婦人参政権運動に新たな活力を与えることに成功したと言っても過言ではない。

クリスタベルはカリスマ性を持った勇敢な女性でWSPUの会員の大きな信望を集め、戦闘的な活動により、何回も投獄されても決して挫けることはなかった。また母エメリンも数十回も逮捕、投獄され、刑務所において断食、断飲を何度も繰り返したため、ひどく健康を損ねたにもかかわらず、決して弱音を吐くこともなく、体の衰弱が激しく歩行が困難な時でさえ、WSPUの支持者の前に堂々と立ち、婦人参政権のための演説をし続けた。特にエメリンの勇気と屈折せぬ態度に感銘を覚える女性も多く、彼女のお葬式には何千ものWSPUの会員だった女性たちが参列した⁹³。この2人のゆるぎなき信念と献身的な態度により、WSPUは一定の期間に大量のメンバーを獲得することに成功したと言っても過言ではない。

確かにエメリン、クリスタベルは女性参政権運動のリーダーとしては優れた面を多く持っていたが、WSPUのメンバーに2人への絶対的な忠誠を誓わせるというような独裁者的面も持っていた⁹⁴。そのため、WSPUは非民主的組織となってしまう、分裂をたびたび経験するという弱点があった。たとえば、パンクハースト母娘の一方的なやり方に腹をたてたTeresa Billington-Greig、Charlotte Despardは女性自由連盟という新しい民主的な婦選運動の連盟を結成しWSPUを去った。WSPUは表向きには男性の加入を認めていなかったが、会計係を務めていたエメリン・ペーシック＝ローレンスの夫で弁護士のフレデリックは妻と共にWSPUの活動に物心両面の援助をした⁹⁵。1906年から1912年までの間に少なくとも6,610ポンドという多額をWSPUの活動費のために寄付し、機関誌の創刊、編集に携わり、刑務所に送られたWSPUのメンバーの法律顧問としても多大なる貢献をした⁹⁶。にもかかわらず、夫妻はパンクハースト母娘によって1912年にWSPUから追放された。June Purvisによるとペーシック＝ローレンス夫妻がWSPUの中でパンクハースト母娘以上の権力を握ることを恐れていたクリスタベルは、フレデリックがエスカレートするばかりのWSPUの過激な行動は婦人参政権運動の支持者を遠ざける結果を招く恐れがあると反対したことに腹をたて、自分たちの決定に従えないものは除名すべきと、夫妻を一方的に追放した⁹⁷。更にエメリン、クリスタベルは次女シルビアまでも1914年に除名してしまった⁹⁸。WSPUは中産階級色が強すぎるので、もっと広範囲の女性たちを対象にすべきとシルビアは考え、1912年にロンドン東部に支部を設立し、労働者階級の女性たちの間にもっと婦人参政権運動を広めようとした。WSPUが設立されたマンチェスター時代には、労働者階級の女性を積極的に婦人参政権運動に参加させようとしていたエメリン、クリスタベルは、ロンドンに本部を移して以来、その方針を全く変えてしまった。1914年までには2人はWSPUの婦

人参政権運動には自分たちが選んだ中産階級以上の女性しか必要ないと公言し、シルビアの率いる労働者階級の女性を否認し、シルビアをも一方的にWSPUから追放したのである。更に1910年以降のWSPUの数々の過激な行動は多大の被害を及ぼし、政治家ばかりでなく、一般大衆の反感をかい、婦人参政権改正運動をかえって遅らせてしまったと考えられる。WSPUに愛想をつかした女性たちはWSPUのライバルで合法的な手段によってのみ参政権運動を着実に進めてきたNUWSSに加入したため、NUWSSの会員数が1910年以後急速に伸びた。また最初の中産階級の女性によってのみ運営されていたNUWSSは全国的な組織になるにつれて、労働者階級の女性たちも積極的にメンバーに加えていき、民主的な団体へと成長していった。

最後にWSPUが英国国内、世界の婦人参政権運動に及ぼした影響について述べたい。英国国内に関しては、WSPUの影響を受けた女性たちによって新しい女性主導の婦人参政権団体がいくつか誕生した⁹⁹。労働組合の女性たちは1908年にPeople's Suffrage Federation（国民参政権連合）を、英国国教会の女性たちは1909年にChurch League for Women's Suffrage（婦人参政権教会連盟）を、カトリック教徒のフェミニストたちは1911年にCatholic Women's Suffrage Society（カトリック婦人参政権協会）を、ウエールズの婦人参政権運動者はCymric Suffrage Union（キムリック参政権連盟）を1911年に設立した。ケンブリッジ、オックスフォード、グラスゴー、エジンバラ、セント・アンドリューズ大学にも婦人参政権団体が設立された。

またWSPUやNUWSSの影響を受けて、婦人参政権男性連盟（Men's League for Women's Suffrage）、婦人の参政権を求める男性有権者同盟（Male Electors' League for Women's Suffrage）、婦人参政権男性連合（Men's Federation for Women's Suffrage）、女性の権利を求める男性協会

(Men's Society for Women's Rights)、婦人参政権を求める自由党の男性協会 (Liberal Men's Association for Women's Suffrage) などのような男性独自の婦人参政権団体が英国に生まれたことも忘れてはならない¹⁰⁰。婦人参政権運動は女性によってのみ行われるべきとパンクハースト母娘は主張していたが、一般に想像される以上に多くの男性が婦人参政権運動支援団体に入り、中には活発な活動をした男性もあり、その結果ある種の社会的制裁を受けた男性もいた。このように男性が補助的立場にし、婦人参政権運動に対して組織的なサポートをし、貢献をしたことは貴重な史実であり、日本の婦選運動などにはみられない大きな特徴であったと思う。また婦人参政権に反対する婦人団体 Women's National Anti-Suffrage League も 1908 年に Lady Jersey によって作られた¹⁰¹。これらの団体の設立によって婦人参政権に関する多くの討論が展開されたことにより、婦人参政権という問題が一般庶民の間にも身近なものとして、広く浸透していたのも事実である。

WSPU が世界に及ぼした影響はというと、アメリカにおいては WSPU に大変刺激された Lucy Burns (ルーシー・バーンズ) と Alice Paul (アリス・ポール) によって Congressional Union for Woman Suffrage (婦人参政権議会連合) が結成された。ポールは英国留学中の 1907 年に WSPU の会員となり 6 回も逮捕されるほど WSPU の戦闘的な婦人参政権運動に積極的に参加した。バーンズも 1908 年に英国旅行中に WSPU の指導者たちと出会い、WSPU の会員となり、1910 年から 1912 年までエジンバラ支部の有給活動家として、婦人参政権運動に身を捧げた。彼女は戦闘的な活動をしたため、数回逮捕され、刑務所でハンガーストライキをした。WSPU の活動を通して、ポールと出会い、親交を深めた。2 人はアメリカに戻ると National American Woman Suffrage Association (全国アメリカ婦人参政権協会) に入り、婦人参政権運動をアメリカにおいて始めるが、

WSPUとは全く異なった、沈滞気味の同協会の運動に失望し、婦人参政権連邦修正条項の議案を可決するために婦人参政権議会連合を新しく作った。2人はWSPUで学んだ戦術を効果的に用いて、WSPUの先例に従って、人目を引く宣伝、デモ行進、請願運動を行い、機関誌 *The Suffragist* も刊行して、アメリカの婦人参政権運動に新しく力強い息吹を与えた¹⁰²。

WSPUの婦人参政権運動は日本でも長谷川如是閑、菊池幽芳などによって『東京朝日新聞』、『大阪毎日新聞』の中で1910年に詳しく紹介された¹⁰³。1910年の5月から8月までロンドンのShepherds Bushで開催されたThe Japan-British Exhibition（日英博覧会）の取材のため派遣された2人は、WSPUのロンドンにおける大規模なデモ行進に出くわした¹⁰⁴。それまで2人にとって全く無縁であった異邦人のような英国女性の婦人参政権運動に好奇心をそそられた2人は、WSPUのメンバーにインタビューをして、それを基にして書いた記事を新聞に連載した。その後もWSPUやパンクハースト母、娘については『新真婦人』や『女性同盟』においても紹介され、日本における婦人参政権運動家たちに勇気と活力を与えた¹⁰⁵。新婦人協会の会員の中には英国のWSPUの過激な行動と目的に向かって前進あるのみという頑なな姿勢を羨ましく思うものもでてきたが、WSPUの戦闘的な手段は用いられなかった。

また一方、日本国内においては日本の保守的な男性はもとより西洋の新しい女を日本に紹介した坪内逍遙でさえもWSPUの過激な行動を批判した。彼は英国の婦人参政権運動家のような女性を白アリにたとえて、日本の女性が彼女らのような行動をとるようになったら、日本の家制度は崩壊してしまうと恐れていた¹⁰⁶。藤村義郎男爵も全く同じ意見で、そのために国会において新婦人協会が提出した治安警察法第5条改正案や衆議院議員選挙法改正案に反対した¹⁰⁷。このことから日本の婦人参政権運動の前途がいかに多難であったかが想像される。

他の国々の婦人参政権運動家たちも WSPU の過激な戦法は、合法的な方法が成功しない場合の最後の手段として使えると考えていたが、英国以外の国ではほとんど用いられなかった。しかし、WSPU の婦人参政権運動は世界中で高く評価され、大きなインパクトを与えたことは私の研究が明らかにした新事実である。

注

- 1 Roger Fulford, *Votes for Women*, London: Faber and Faber, 1958; David Mitchell, *The Fighting Pankhursts*, London: Jonathan Cape, 1967; Constance Rover, *Women's Suffrage and Party Politics in Britain, 1866-1914*, London: Routledge and Kegan Paul, 1967; Andrew Rosen, *Rise up Women: The Militant Campaign of the Women's Social and Political Union 1903-14*, London: Routledge and Kegan Paul, 1974; David Morgan, *Suffragists and Liberals: the Politics of Woman Suffrage in Britain*, Oxford: Basil Blackwell, 1975; Martin Pugh, *Electoral Reform in War and Peace, 1906-1918*, London: Routledge, 1978; Brian Harrison, *Separate Spheres: The Opposition to Women's Suffrage in Britain*, London: Croom Helm, 1978; Jill Liddington & Jill Norris, *One Hand Tied Behind Us: The Rise of the Women's Suffrage Movement*, London: Virago, 1978; Stanley Holton, *Feminism and Democracy: Women's Suffrage and Reform Politics in Britain 1900-1918*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- 2 A. V. John & Claire Eustance (eds.), *The Men's Share? Masculinities, Male Support and Women's Suffrage in Britain, 1890-1920*, London: Routledge, 1997.
- 3 June Purvis, "The Suffragette and Women's History," *Women's History Review*, 14:3 & 4, 2005, p. 359.
- 4 Martin Pugh, *The Pankhursts*, London: Penguin, 2001; June Purvis, *Emmeline Pankhurst: A Biography*, London: Routledge, 2002.
- 5 *Women's History Review*, 14:3 & 4, 2005 参照。
- 6 今井けい『イギリス女性運動史——フェミニズムと女性労働運動の結合』日本経済評論社、1992年；今井けい「針子から治安判事へ——ハナ・ミッチ

- エルの生涯」川本静子、北條文緒編『エッセイ集 ヒロインの時代』国書刊行会、1989年；河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店、2001年；河村貞枝、今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年；エメリン・バンカースト（平井栄子訳）『わたしの記録 婦人参政権運動の闘士バンカースト夫人自伝』現代史出版会、1975年。
- 7 Harold L. Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, Harlow: Pearson Longman, 2007, p. 7; William Thompson & Anna Wheeler, *An Appeal of One Half the Human Race*, London: Virago, 1983. William Thompson については John Charvet, *Feminism*, London: J. M. Dent & Sons, 1982, pp. 50-54 と J. A. & Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England*, Liverpool: Liverpool University Press, 1965, pp. 17-21 参照。
 - 8 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, p. 7.
 - 9 *Ibid.*, p. 8.
 - 10 Harriet Taylor, "Enfranchisement of Women," *Westminster Review*, vol. 55, 1851. Harriet Taylor については Patricia Hollis, *Women in Public: The Women's Movement 1850-1900*, London: George Allen & Unwin, 1979, p. 293 と 佐久間康夫、中野葉子、大田雅孝編『概説イギリス文化史』ミネルヴァ書房、2002年、194頁参照。
 - 11 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, p. 8; Martin Pugh, *Votes for Women in Britain 1867-1928*, London: The Historical Association, 1994, p. 5.
 - 12 The Langham Place Group については Dale Spender, *Women of Ideas and What Men Have Done to Them, From Aphra Behn to Adrienne Rich*, London: ARK Paperbacks, 1983, pp. 413-417; Sandra Stanley Holton, "Women and the Vote," in June Purvis (ed.), *Women's History: Britain, 1850-1945*, London: UCL Press, 1995, p. 279 参照。 *The English Woman's Journal* については Jane Rendall, "A Moral Engine? Feminism, Liberalism and the *English Woman's Journal*," in Jane Rendall (ed.), *Equal or Different: Women's Politics 1800-1914*, Oxford: Basil Blackwell, 1987, pp. 112-138 参照。
 - 13 The Kensington Society については Spender, *Women of Ideas*, pp. 417-420; Lisa Tuttle, *Encyclopedia of Feminism*, Harlow: Longman, 1986, p. 167;

- Sheila Rowbotham, *Women in Movement*, London: Routledge, 1992, p. 70 参照。
- 14 Emily Davies については Margaret Forster, *Significant Sisters: The Grassroots of Active Feminism 1839-1939*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1986, pp. 133-165; Barbara Stephen, *Emily Davies and Girton College*, London: Constable, 1927 参照。Elizabeth Anderson については Jo Manton, *Elizabeth Garrett Anderson*, London: Methuen, 1965; Philippa Levine, *Victorian Feminism 1850-1900*, London: Hutchinson, 1987, pp. 41-43 参照。
 - 15 Helen Taylor to Barbara Bodichon, 9 May 1866, McCrimmon Bodichon Collection, The Women's Library.
 - 16 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, p. 8.
 - 17 Mill については Charvet, *Feminism*, pp. 30-42; Banks, *Feminism and Family Planning*, pp. 25-26; Barbara Caine, *English Feminism, 1780-1980*, Oxford: Oxford University Press, 1999, pp. 104-108 参照。
 - 18 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, p. 8.
 - 19 Pugh, *Votes for Women in Britain*, pp. 9-10.
 - 20 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, p. 9.
 - 21 Lydia Becker については Spender, *Women of Ideas*, pp. 420-429; Audrey Kelly, *Lydia Becker and The Cause*, Lancaster: University of Lancaster, 1992 参照。
 - 22 Pugh, *The Pankhursts*, p. 52; Olive Banks, *Becoming a Feminist: The Social Origins of 'First Wave' Feminism*, Brighton: Wheatsheaf Books, 1986, p. 110.
 - 23 Morgan, *Suffragists and Liberals*, p. 13.
 - 24 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, pp. 12-13.
 - 25 Pugh, *Votes for Women in Britain*, p. 16.
 - 26 Paula Bartley, *Votes for Women, 1860-1928*, London: Hodder & Stoughton, 2003, pp. 37-39. NUWSS の婦人参政権運動については Ray Strachey, *The Cause*, London: Virago, 1978 参照。
 - 27 WSPU の設立については Purvis, *Emmeline Pankhurst*, pp. 65-78; Pugh, *The Pankhursts*, pp. 80-98 参照。
 - 28 Emmeline の結婚については Purvis, *Emmeline Pankhurst*, pp. 18-38 参照。
 - 29 Richard Pankhurst については Olive Banks, *The Biographical Dictionary of*

- British Feminists, 1800-1930*, vol. 1, Brighton: Wheatsheaf Books, 1985, pp. 152-153; Pugh, *The Pankhursts*, pp. 16-30; E. Sylvia Pankhurst, *The Suffragette Movement: An Intimate Account of Persons and Ideals*, London: Virago, 1984, pp. 56-57; Mitchell, *The Fighting Pankhursts*, pp. 19-25 参照。
- 30 Sylvia Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 130-132.
- 31 Emmeline Pankhurst, *My Own Story*, London: Virago, 1979, p. 57.
- 32 今井『イギリス女性運動史』340頁。Mary Davis, *Sylvia Pankhurst: A Life in Radical Politics*, London: Pluto Press, 1999, pp. 20-21; Diane Atkinson, *Votes for Women*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. 16 参照。
- 33 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 186-188; Atkinson, *Votes for Women*, p. 44; Hannah Mitchell, *The Hard Way Up*, London: Virago, 1977; Annie Kenney, *Memories of a Militant*, London: Arnold, 1924 参照。
- 34 Atkinson, *Votes for Women*, p. 16.
- 35 WSPU Membership Card (designed by Sylvia Pankhurst), c. 1905, C/1/1, The Women's Library.
- 36 E. Pankhurst, *My Own Story*, p. 65; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 189-195; E. Sylvia Pankhurst, *The Life of Emmeline Pankhurst: The Suffragette Struggle for Women's Citizenship*, London: T. Werner Laurie Ltd., 1935, pp. 51-52; Christabel Pankhurst, *Unshackled: The Story of How We Won the Vote*, London: Hutchinson & Co., 1959, p. 54.
- 37 Atkinson, *Votes for Women*, p. 16.
- 38 *Ibid.*, p. 10 & p. 15; Tuttle, *Encyclopedia of Feminism*, p. 316; *Daily Mail*, 10 January 1906 参照。
- 39 Morgan, *Suffragists and Liberals*, pp. 40-41.
- 40 Purvis, *Emmeline Pankhurst*, p. 83.
- 41 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, p. 212; *Manchester Guardian*, 21 May 1906.
- 42 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 220-227.
- 43 *Ibid.*, pp. 241-251.
- 44 Bartley, *Votes for Women*, pp. 57-64.
- 45 Pugh, *The Pankhursts*, p. 170.

- 46 Atkinson, *Votes for Women*, p. 17.
- 47 *Ibid.*, pp. 17–18.
- 48 Antonia Raeburn, *The Militant Suffragettes*, Newton Abbot: Victorian & Modern History Book Club, 1974, p. 58.
- 49 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 228–240.
- 50 Atkinson, *Votes for Women*, p. 19.
- 51 Bartley, *Votes for Women*, pp. 45–46; Smith, *The British Women's Suffrage Campaign*, pp. 43–44.
- 52 Women's Freedom League については E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 261–274; Smith, *The British Women's Suffrage Campaign*, pp. 44–46 参照。
- 53 ロンドンと the Home Counties が 64、そしてイングランドの残りの地域、スコットランド、ウェールズに 58 の支部が設立された。Bartley, *Votes for Women*, p. 47.
- 54 Pugh, *The Pankhursts*, p. 190.
- 55 Liz Stanley & Ann Morley, *The Life and Death of Emily Wilding Davison*, London: The Women's Press, 1988, p. 88.
- 56 Atkinson, *Votes for Women*, p. 24; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 275–285.
- 57 Christabel Pankhurst, "Some Questions Answered," Published Circulars, c. 1912, DE2101/141/2, Leicestershire Records Office.
- 58 Raeburn, *The Militant Suffragettes*, pp. 57–60; "Great Demonstration in Hyde Park," *Demonstration Programme*, 21 June 1908, C/2/1, The Women's Library.
- 59 *The Times*, 22 June 1908.
- 60 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 286–287.
- 61 Raeburn, *The Militant Suffragettes*, pp. 60–61.
- 62 Diane Atkinson, *Funny Girls: Cartooning for Equality*, London: Penguin, 1997, p. 11.
- 63 Jill Liddington, *Rebel Girls: Their Fight for the Vote*, London: Virago, 2006, p. 71.
- 64 E. Pankhurst, *My Own Story*, pp. 251 & 259.

- 65 *Ibid.*, pp. 251–252; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 301–311; Raeburn, *The Militant Suffragettes*, pp. 108–116; Mary Turner, *The Women's Century: A Celebration of Changing Roles 1900–2000*, Richmond: The National Archives, 2003, pp. 25–29.
- 66 Force-feeding (食餌強制) についてはE. Pankhurst, *My Own Story*, p. 255; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 312–319; Constance Lytton, *Prisons and Prisoners*, London: Heinemann, 1914; Pugh, *The Pankhursts*, pp. 192–196; Frederick W. Lawrence, *Women's Fight for the Vote*, London: The Woman's Press, 1911, pp. 122–129 参照。
- 67 Petition against forcible feeding and asking for political status for Mary Leigh and Gladys Evans, August 1912, C/5, The Women's Library.
- 68 Diana Souhami, *A Woman's Place: The Changing Picture of Women in Britain*, Middlesex: Penguin, 1986, p. 23; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 334–355.
- 69 「黒の金曜日」(Black Friday) については Purvis, Emmeline Pankhurst, pp. 150–152; Pugh, *The Pankhursts*, pp. 218–219; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 342–346 参照。
- 70 *Ibid.*, pp. 351–355.
- 71 Frederick Ryan, “A Police Court Impression,” *Votes for Women*, 20 March 1912, p. 403; “The Conspiracy Charge,” *Votes for Women*, 29 March 1912, p. 404; “The Echoes of the Suffrage Debate,” *Votes for Women*, 16 May 1913, p. 479; “The Suffragist Conspiracy Charge,” *Votes for Women*, 16 May 1913, p. 480.
- 72 June Purvis, “Emmeline Pankhurst (1858–1928) and Votes for Women,” in June Purvis & Sandra Stanley Holton, *Votes for Women*, London: Routledge, 2000, pp. 123–125; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 393–410; Bartley, *Votes for Women*, pp. 69–73; Glenda Norquay, *Voices and Votes: A Literary Anthology of the Women's Suffrage Campaign*, Manchester: Manchester University Press, 1995, pp. 92–170; E. Pankhurst, *My Own Story*, pp. 260–261; Elizabeth Crawford, “Police, Prisons and Prisoners: The View from the Home Office,” *Women's History Review*, vol. 14, number 3 & 4, 2005, pp. 487–505; *The Leicester Pioneer*, 17, 24 & 31 July 1914;

- Christabel Pankhurst, "Broken Windows," Published Circulars, c. 1912, DE2101/141/6, Leicestershire Records Office; *The Leicester Pioneer*, 12 & 13 April, 1913; *Daily Express*, 22 November 1911; Ernest Bowden, Detective Sergeant, New Scotland Yard, HO144/1119, The National Archives; Emmeline Pethick Lawrences's letter on 13 November 1911, HO144/1119, The National Archives; Richard Melhuish Papers, HO144/1119, The National Archives; List of suffragette prisoners received at Holloway, HO144/1119, The National Archives; Suffragette Index, HO45/24665, The National Archives.
- 73 Atkinson, *Votes for Women*, p. 34; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 393-410; Bartley, *Votes for Women*, pp. 69-73.
- 74 The Prisoners' Temporary Discharge for Ill-Health Act (疾病囚仮出獄法) については E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 393-410; Fulford, *Votes for Women*, pp. 291-292; Purvis, *Emmeline Pankhurst*, pp. 217-231; E. Pankhurst, *My Own Story*, pp. 307-308; Copy of the Prisoners' Temporary Discharge for Ill-Health Bill, 26 March 1913, F/8, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; "To Stop the Torture of Forcible Feeding and to Repeal the 'Cat and Mouse Act'," n.d., F/8, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; "Artificial Feeding as Practised in Our Hospitals, Is Not Forcible Feeding, as Performed in Our Prisons," circular, n.d., F/8, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library 参照。
- 75 Atkinson, *Votes for Women*, pp. 34-35.
- 76 この事件については E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 464-470; Stanley, *The Life and Death of Emily Wilding Davison*, pp. 103-104; Dorling's list of Epsom Races and the race card marked up by Emily Wilding Davison, 4 June 1913, A/7/1, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; List of possessions found on Emily Wilding Davison by the Metropolitan Police, Epsom Station, 10 June 1913, A/7/2, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; Photocopy of death certificate, 17 June 1913, A/7/3, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library 参照。

- 77 WSPU notice of funeral, giving arrangements for procession, 11 June 1913, A/8/1, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; Ticket for service at St. George's Church, Hart Street, Bloomsbury, 14 June 1913, A/8/2, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; Programme for service, with tribute to Emily Wilding Davison, 14 June 1913, A/8/3, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; Hymn Sheet for Service, 14 June 1913, A/8/4, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; Memorial Service at St. George's Bloomsbury Order Sheet, 8 June 1915, A/8/5, Papers of Emily Wilding Davison, The Women's Library; *The Suffragette*, 13 & 20 June 1913; Souhami, *A Woman's Place*, pp. 26–28.
- 78 Liddington, *Rebel Girls*, p. 275.
- 79 *The Daily Mirror*, 1 March 1914.
- 80 Atkinson, *Votes for Women*, pp. 34–35.
- 81 *Ibid.*, p. 36; Olive Banks, *Becoming a Feminist: The Social Origins of 'First Wave' Feminism*, Brighton: Wheatsheaf Books, 1986, p. 141.
- 82 *News of the World*, 11 April 1913; *The Times*, 24 April 1914; Richard Whitmore, *Alice Hawkins and The Suffragette Movement in Edwardian Leicester*, Derby: The Breedon Books, 2007, p. 141.
- 83 Mitchell, *The Fighting Pankhursts*, pp. 50–53; Smith, *The British Women's Suffrage Campaign*, pp. 72–75.
- 84 Purvis, *Emmeline Pankhurst*, pp. 300–317; Pugh, *The Pankhursts*, pp. 340–344; Mitchell, *The Fighting Pankhursts*, pp. 51–53.
- 85 Rosen, *Rise Up Women!*, p. 252; Smith, *The British Women's Suffrage Campaign*, p. 78.
- 86 *Ibid.*, pp. 75–77; Johanna Alberti, *Beyond Suffrage: Feminists in War and Peace, 1914–28*, London: Macmillan, 1989, pp. 38–70.
- 87 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 514–534; E. Sylvia Pankhurst, *The Home Front: A Mirror to Life in England during The First World War*, London: The Cresset Library, 1987; Sheila Rowbotham, *Hidden from History*, London: Pluto Press, 1992, pp. 115–117. East London Federation of Suffragettes については Barbara Winslow, *Sylvia Pankhurst: Sexual Politics*

- and Political Activism*, London: UCL Press, 1996, pp. 41–74 参照。
- 88 Atkinson, *Votes for Women*, p. 38.
- 89 Martin Pugh, *Women and The Women's Movement in Britain 1914–1959*, London: Macmillan, 1992, pp. 18–34; Nigel Fountain (ed.), *Women at War*, London: Michael O'Mara Books, 2002 の chapter 4 参照。
- 90 Raeburn, *The Militant Suffragettes*, pp. 240–241.
- 91 Pugh, *The Pankhursts*, pp. 345–354.
- 92 *Ibid.*, pp. 406–409; Purvis, *Emmeline Pankhurst*, pp. 318–353; *The Daily Mirror*, 19 June 1928; *Daily Sketch*, 19 June, 1928, *The Evening News*, 19 June 1928; *Express*, 19 June 1928; *Mail*, 19 June 1928; *The Daily Telegraph*, 19 June 1928.
- 93 *Daily News*, 14 June 1928; *Evening Standard*, 14 June 1928; *Manchester Guardian*, 15 June 1928; *The Times*, 15 & 16 June 1928.
- 94 Hugh B. Chapman, “Pen Portraits of Mrs Pankhurst,” *Votes for Women*, 29 March 1912, p. 404; Yoshio Markino, “Our Christabel,” *Votes for Women*, 29 March 1912, pp. 404–405.
- 95 J. E. M. Brailsford, “Mrs Pethick Lawrence,” *Votes for Women*, p. 405; Mary Neal, “Mr F. W. Pethick Lawrence,” *Votes for Women*, p. 405.
- 96 F. W. Pethick Lawrence, “Is the English Law Unjust to Women,” Published Circulars, c. 1912, C/4/2/, The Women's Library; E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 293–361 & 411–415.
- 97 E. Pankhurst, *My Own Story*, p. 261; Purvis, *Emmeline Pankhurst*, p. 199.
- 98 E. S. Pankhurst, *The Suffragette Movement*, pp. 516–517; Reprint of Sylvia Pankhurst's Speech, East London Federation of WSPU, 20 June 1913, The Women's Library.
- 99 Smith, *The British Women's Suffrage Campaign*, pp. 30–32.
- 100 Bartley, *Votes for Women*, pp. 94–97.
- 101 Olive Banks, *Faces of Feminism*, Oxford: Martin Robertson, 1981; pp. 130–131; Maroula Joannou, “Mary Augusta Ward (Mrs. Humphry) and the Opposition to Women's Suffrage,” *Women's History Review*, vol. 14, Number 3 & 4, 2005, pp. 561–576.
- 102 Tuttle, *Encyclopedia of Feminism*, pp. 52–53 & 243–244 と清水和美「欧米女

性解放思想と優生学の関連について」女性の歴史研究会編『女性解放運動の
さきがけ新婦人協会の研究』第3号、2003年、34-36頁参照。

- 103 Hiroko Tomida, *Hiratsuka Raichō and Early Japanese Feminism*, Leiden: Brill, 2004, pp. 215-216; 「家庭思想の復活」上・下『大阪毎日新聞』1910年7月4-5日、「女権拡張示威運動」上・中・下『東京朝日新聞』1910年8月1-3日；長谷川如是閑『倫敦！倫敦？』岩波書店、2005年、379-390頁参照。
- 104 日英博覧会については Ayako Hotta-Lister, “The Japan-British Exhibition of 1910: the Japanese Organizers,” in Ian Nish (ed.), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, London: Japan Library, 1994, pp. 146-57; “Celebrated for the First Time Outside Japan: The Festival of the Rice Harvest, at the Anglo-Japanese Exhibition,” *The Illustrated London News*, 27 August 1910; “The Japan-British Exhibition,” *The Times*, 21 May 1910; “Japanese Journalists in London,” *The Times*, 13 May 1910; Hiroko Tomida, “Hiratsuka Raichō, The Seitō Society, and the Emergence of the New Woman in Japan,” in Hiroko Tomida & Gordon Daniels (eds.), *Japanese Women: Emerging from Subservience 1868-1945*, Folkestone, Kent: Global Oriental, 2005, p. 198 参照。
- 105 マーキノ・ヨシオ（中尾清太郎訳）「WSPUへ初めての訪問」『新真婦人』第21号、1915年1月1日、39-45頁。
- 106 坪内逍遙『所謂新シイ女』精美堂、1912年とTomida, “Hiratsuka Raichō, The Seitō Society, and the Emergence of the New Woman in Japan,” p. 199 参照。
- 107 奥むめお『奥むめお自伝、野火あかあかと』ドメス出版、1989年、67頁。

参考文献

I. 一次資料

A. 私文書・公文書

(i) Leicestershire Records Office

Christabel Pankhurst, “Broken Windows,” Published Circulars, c. 1912, DE2101/141/6.

Christabel Pankhurst, “Some Questions Answered,” Published Circulars, c. 1912, DE2101/141/2.

(ii) The National Archives

Ernest Bowden, Detective Sergeant, New Scotland Yard, HO144/1119.

Emmeline Pethick Lawrences's letter on 13 November 1911, HO144/1119.

List of Suffragette Prisoners Received at Holloway, HO144/1119.

Richard Melhuish Papers, HO144/1119.

Suffragette Index, HO45/24665.

(iii) The Women's Library

"Artificial Feeding as Practised in Our Hospitals, is Not Forcible Feeding, as Performed in Our Prisons," Circular, n.d., F/8, Papers of Emily Wilding Davison.

Copy of the Prisoners' Temporary Discharge for Ill-Health Bill, 26 March 1913, F/8, Papers of Emily Wilding Davison.

Dorling's list of Epsom Races and the race card marked up by Emily Wilding Davison, 4 June 1913, A/7/1, Papers of Emily Wilding Davison.

F. W. Pethick Lawrence, "Is the English Law Unjust to Women," Published Circulars, c. 1912, C/4/2/.

"Great Demonstration in Hyde Park," Demonstration Programme, 21 June 1908, C/2/1.

Helen Taylor to Barbara Bodichon, 9 May 1866, McCrimmon Bodichon Collection.

Hymn Sheet for Service, 14 June 1913, A/8/4, Papers of Emily Wilding Davison.

List of possessions found on Emily Wilding Davison by the Metropolitan Police, Epsom Station, 10 June 1913, A/7/2, Papers of Emily Wilding Davison.

Memorial Service at St. George's Bloomsbury Order Sheet, 8 June 1915, A/8/5, Papers of Emily Wilding Davison.

Petition against forcible feeding and asking for political status for Mary Leigh and Gladys Evans, August 1912, C/5.

Photocopy of death certificate, 17 June 1913, A/7/3, Papers of Emily Wilding Davison.

Programme for service, with tribute to Emily Wilding Davison, 14 June 1913, A/8/3, Papers of Emily Wilding Davison.

Reprint of Sylvia Pankhurst's Speech, East London Federation of WSPU, 20 June

1913.

Ticket for service at St. George's Church, Hart Street, Bloomsbury, 14 June 1913,
A/8/2, Papers of Emily Wilding Davison.

"To Stop the Torture of Forcible Feeding and to Repeal the "Cat and Mouse
Act"," n.d., F/8, Papers of Emily Wilding Davison.

WSPU Membership Card (designed by Sylvia Pankhurst), c. 1905, C/1/1.

WSPU notice of funeral, giving arrangements for procession, 11 June 1913,
A/8/1, Papers of Emily Wilding Davison.

B. 新聞・機関誌

(i) 英語文献

Daily Express

Daily Mail

Daily News

Daily Sketch

Evening Standard

Express

Mail

Manchester Guardian

News of the World

The Daily Mirror

The Daily Telegraph

The Evening News

The Illustrated London News

The Leicester Pioneer

The Suffragette

The Times

Votes for Women

(ii) 日本語文献

『大阪毎日新聞』

『新真婦人』

『東京朝日新聞』

C. 自伝・その他

- Kenney, Annie, *Memories of a Militant*, London: Arnold, 1924.
- Lawrence, Frederick W., *Women's Fight for the Vote*, London: Woman's Press, 1911.
- Lytton, Constance, *Prisons and Prisoners*, London: Heinemann, 1914.
- Mitchell, Hannah, *The Hard Way Up*, London: Virago, 1977.
- Pankhurst, Christabel, *Unshackled: The Story of How We Won the Vote*, London: Hutchinson & Co., 1959.
- Pankhurst, Emmeline, *My Own Story*, London: Virago, 1979.
- Pankhurst, E. Sylvia, *The Home Front: A Mirror to Life in England during The First World War*, London: The Cresset Library, 1987.
- Pankhurst, E. Sylvia, *The Life of Emmeline Pankhurst: The Suffragette Struggle for Women's Citizenship*, London: T. Werner Laurie Ltd., 1935.
- Pankhurst, E. Sylvia, *The Suffragette Movement: An Intimate Account of Persons and Ideals*, London: Virago.
- Strachey, Ray, *The Cause*, London: Virago, 1978.
- Taylor, Harriet, "Enfranchisement of Women," *Westminster Review*, vol. 55, 1851.
- Thompson, William & Wheeler, Anna, *An Appeal of One Half the Human Race*, London: Virago, 1983.

II. 二次資料

A. 英語文献

- Alberti, Johanna, *Beyond Suffrage: Feminists in War and Peace, 1914-28*, London: Macmillan, 1989.
- Atkinson, Diane, *Funny Girls: Cartooning for Equality*, London: Penguin, 1997.
- Atkinson, Diane, *Votes for Women*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- Banks, J. A. & Olive, *Feminism and Family Planning in Victorian England*, Liverpool: Liverpool University Press, 1965.
- Banks, Olive, *Becoming a Feminist: The Social Origins of 'First Wave' Feminism*, Brighton: Wheatsheaf Books, 1986.
- Banks, Olive, *Faces of Feminism*, Oxford: Martin Robertson, 1981.
- Banks, Olive, *The Biographical Dictionary of British Feminists, 1800-1930*, vol. 1, Brighton: Wheatsheaf Books, 1985.

- Bartley, Paula, *Votes for Women, 1860–1928*, London: Hodder & Stoughton, 2003.
- Caine, Barbara, *English Feminism, 1780–1980*, Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Charvet, John, *Feminism*, London: J. M. Dent & Sons, 1982.
- Crawford, Elizabeth, "Police, Prisons and Prisoners: The View from the Home Office," *Women's History Review*, vol. 14, no. 3 & 4, 2005.
- Davis, Mary, *Sylvia Pankhurst: A Life in Radical Politics*, London: Pluto Press, 1999.
- Forster, Margaret, *Significant Sisters: The Grassroots of Active Feminism 1839–1939*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1986.
- Fountain, Nigel, (ed.), *Women at War*, London: Michael O'Mara Books, 2002.
- Fulford, Roger, *Votes for Women*, London: Faber and Faber, 1958.
- Harrison, Brian, *Separate Spheres: The Opposition to Women's Suffrage in Britain*, London: Croom Helm, 1978.
- Hollis, Patricia, *Women in Public: The Women's Movement 1850–1900*, London: George Allen & Unwin, 1979.
- Holton, Sandra Stanley, *Feminism and Democracy: Women's Suffrage and Reform Politics in Britain 1900–1918*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- Holton, Sandra Stanley, "Women and the Vote," in June Purvis (ed.), *Women's History: Britain, 1850–1945*, London: UCL Press, 1995.
- Hotta-Lister, Ayako, "The Japan-British Exhibition of 1910: the Japanese Organizers," in Ian Nish (ed.), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, London: Japan Library, 1994.
- Joannou, Maroula, "Mary Augusta Ward (Mrs. Humphry) and the Opposition to Women's Suffrage," *Women's History Review*, vol. 14, no. 3 & 4, 2005.
- John, A. V., & Eustance, Claire, (eds.), *The Men's Share? Masculinities, Male Support and Women's Suffrage in Britain, 1890–1920*, London: Routledge, 1997.
- Kelly, Audrey, *Lydia Becker and The Cause*, Lancaster: University of Lancaster, 1992.
- Levine, Philippa, *Victorian Feminism 1850–1900*, London: Hutchinson, 1987.
- Liddington, Jill, & Norris, Jill, *One Hand Tied Behind Us: The Rise of the Women's Suffrage Movement*, London: Virago, 1978.
- Liddington, Jill, *Rebel Girls: Their Fight for the Vote*, London: Virago, 2006.

- Manton, Jo, *Elizabeth Garrett Anderson*, London: Methuen, 1965.
- Mitchell, David, *The Fighting Pankhursts*, London: Jonathan Cape, 1967.
- Morgan, David, *Suffragists and Liberals: the Politics of Woman Suffrage in Britain*, Oxford: Basil Blackwell, 1975.
- Norquay, Glenda, *Voices and Votes: A Literary Anthology of the Women's Suffrage Campaign*, Manchester: Manchester University Press, 1995.
- Pugh, Martin, *Electoral Reform in War and Peace, 1906-1918*, London: Routledge, 1978.
- Pugh, Martin, *The Pankhursts*, London: Penguin, 2001.
- Pugh, Martin, *Votes for Women in Britain 1867-1928*, London: The Historical Association, 1994.
- Pugh, Martin, *Women and The Women's Movement in Britain 1914-1959*, London: Macmillan, 1992.
- Purvis, June, *Emmeline Pankhurst: A Biography*, London: Routledge, 2002.
- Purvis, June, "Emmeline Pankhurst (1858-1928) and Votes for Women," in June Purvis & Sandra Stanley Holton, *Votes for Women*, London: Routledge, 2000.
- Purvis, June, "The Suffragette and Women's History," *Women's History Review* 14:3 & 4, 2005.
- Raeburn, Antonia, *The Militant Suffragettes*, Newton Abbot: Victorian & Modern History Book Club, 1974.
- Rendall, Jane, "A Moral Engine? Feminism, Liberalism and the *English Woman's Journal*," in Jane Rendall (ed.), *Equal or Different: Women's Politics 1800-1914*, Oxford: Basil Blackwell, 1987.
- Rosen, Andrew, *Rise Up Women: The Militant Campaign of the Women's Social and Political Union 1903-14*, London: Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Rover, Constance, *Women's Suffrage and Party Politics in Britain, 1866-1914*, London: Routledge and Kegan Paul, 1967.
- Rowbotham, Sheila, *Hidden from History*, London: Pluto Press, 1992.
- Rowbotham, Sheila, *Women in Movement*, London: Routledge, 1992.
- Smith, Harold L., *The British Women's Suffrage Campaign 1866-1928*, Harlow: Pearson Longman, 2007.
- Souhami, Diana, *A Woman's Place: The Changing Picture of Women in Britain*,

- Middlesex: Penguin, 1986.
- Spender, Dale, *Women of Ideas and What Men Have Done to Them, From Aphra Behn to Adrienne Rich*, London: ARK Paperbacks, 1983.
- Stanley, Liz & Morley, Ann, *The Life and Death of Emily Wilding Davison*, London: The Women's Press, 1988.
- Stephen, Barbara, *Emily Davies and Girton College*, London: Constable, 1927.
- Tomida, Hiroko, *Hiratsuka Raichō and Early Japanese Feminism*, Leiden: Brill, 2004.
- Tomida, Hiroko, "Hiratsuka Raichō, The Seitō Society, and the Emergence of the New Woman in Japan," in Hiroko Tomida & Gordon Daniels (eds.), *Japanese Women: Emerging from Subservience 1868-1945*, Folkestone, Kent: Global Oriental, 2005.
- Turner, Mary, *The Women's Century: A Celebration of Changing Roles 1900-2000*, Richmond: The National Archives, 2003.
- Tuttle, Lisa, *Encyclopedia of Feminism*, Harlow: Longman, 1986.
- Whitmore, Richard, *Alice Hawkins and The Suffragette Movement in Edwardian Leicester*, Derby: The Breedon Books, 2007.
- Winslow, Barbara, *Sylvia Pankhurst: Sexual Politics and Political Activism*, London: UCL Press, 1996.
- B. 日本語文献**
- 今井けい『イギリス女性運動史——フェミニズムと女性労働運動の結合』日本経済評論社、1992年。
- 今井けい「針子から治安判事へ——ハナ・ミッチェルの生涯」川本静子、北條文緒編『エッセイ集 ヒロインの時代』国書刊行会、1989年。
- 奥むめお『奥むめお自伝、野火あかあかと』ドメス出版、1989年。
- 河村貞枝、今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年。
- 河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店、2001年。
- 佐久間康夫、中野葉子、大田雅孝編『概説イギリス文化史』ミネルヴァ書房、2002年。
- 清水和美「欧米女性解放思想と優生学の関連について」女性の歴史研究会編『女性解放運動のさきがけ新婦人協会の研究』第3号、2003年。
- 坪内逍遙『所謂新シイ女』精美堂、1912年。
- 長谷川如是閑『倫敦！倫敦？』岩波書店、2005年。

パンカースト、エメリン（平井栄子訳）『わたしの記録 婦人参政権運動の闘士パンカースト夫人自伝』現代史出版会、1975年。

Chronological Table Concerning Women's Suffrage in Britain

- 1832: The Great Reform Act was introduced. It gave the vote to half a million more men, but the Act excluded women.
- 1865: The Kensington Society, a debating group, was founded. It advocated women's suffrage among other reforms.
- 1866: The women's suffrage petition, prepared by Barbara Bodichon and the members of her women's group, was presented to Parliament by John Stuart Mill.
- 1867: The Manchester Women's Suffrage Society was established.
The Second Reform Act was passed. It increased the number of male voters, but no progress was made on votes for women.
- 1868 The National Society for Women's Suffrage (NSWS) was founded.
- 1869: The Municipal Franchise Act allowed female rate payers to vote in municipal elections.
- 1870: Jacob Bright introduced the first women's suffrage bill which was drafted by Richard Pankhurst.
Lydia Becker founded *the Women's Suffrage Journal*.
- 1884: The Third Reform Act was introduced. It gave the vote to nearly two-thirds of the male population, but no progress was made on votes for women.
- 1893: The Independent Labour Party (ILP) was established.
- 1897: The National Union of Women's Suffrage Societies (NUWSS) was created.
- 1903: The Women's Social and Political Union (WSPU) was founded in Manchester.
- 1905: Christabel Pankhurst and Annie Kenney were arrested.
- 1906: The Liberal Party won the general election.
The Women's Social and Political Union moved its headquarters from Manchester to London.
- 1907: The Men's League for Women's Suffrage was formed.

- The first issue of *Votes for Women* was published by the Women's Social and Political Union.
- The Women's Freedom League was established.
- 1908: The Women's National Anti-Suffrage League was established by Lady Jersey.
- Henry Asquith became Prime Minister.
- The Hyde Park mass meeting was organized by the Women's Social and Political Union.
- 1910: The Conciliation Committee was created.
- The Conciliation Bill passed its Second Reading, but it was shelved.
- The Women's Social and Political Union's clash with police, which has become known as 'Black Friday'.
- 1912: Christabel Pankhurst fled to Paris.
- The Pethick Lawrences were expelled from the Women's Social and Political Union.
- 1913: Emily Wilding Davison ran onto the Derby course during a race, and died after colliding with the King's horse.
- The Prisoner's Temporary Discharge for Ill-Health Act, which was known as the Cat and Mouse Act, was introduced.
- 1914: Sylvia Pankhurst was expelled from the Women's Social and Political Union.
- The First World War began.
- The Women's Social and Political Union suspended its suffrage activities and joined the war effort.
- 1918: The end of the First World War.
- The Representation of the People Act extended the vote to women aged 30 and above who were also local electors or the wives of local government electors.
- 1928: The Representation of the People (Equal Franchise) Act enfranchised women aged 21 and over.